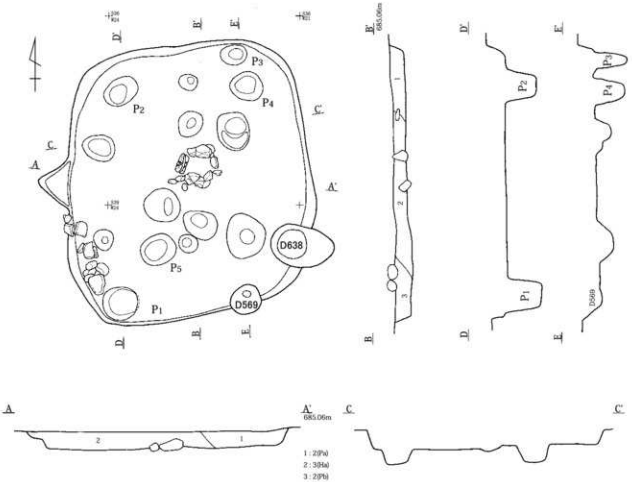
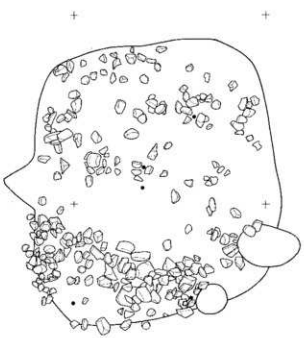
28 号住居



28 号住遺物出土状況



28 号住炉

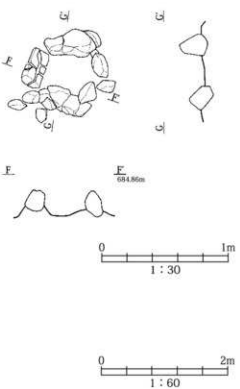


図 133　28 号住居実測図

28 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
28 住				5		1			3	142	4	1		4	1	120	2	101
	33360			110		30			30	4120	50	10		100	10	4430	20	4510
S36W21				1					12	84	12	11	9	16	23	129	6	103
	41320			10					210	2800	220	170	120	670	840	1740	40	3950
S36W24				1	1				3	23	2		31	42	2	190	20	97
(26･28 住)	43210			10	10				30	420	20		360	1120	40	3360	350	4570
S39W21				3					3	48	8	3	3	17	17	120	8	62
	30715			190					20	2070	90	60	60	280	400	1960	80	2220
S39W24				2					3	31	6	2	9	3	7	67	3	50
(25･26･28 住)	20825			90					30	770	190	70	170	40	240	2210	30	1690

図 134　28 号住居出土土器実測図・拓影（1）

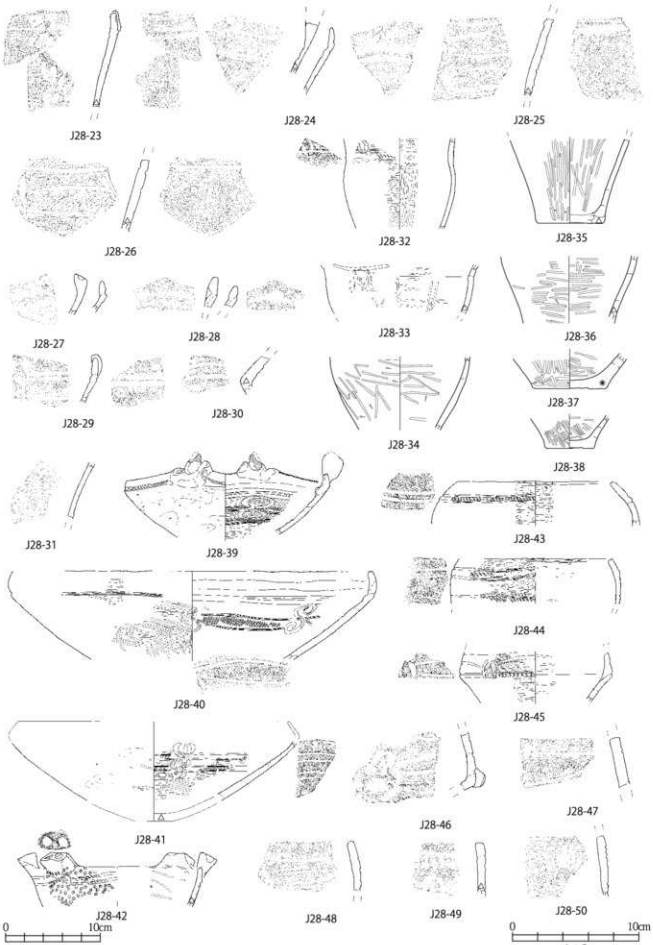


図 135　28 号住居出土土器実測図・拓影（2）

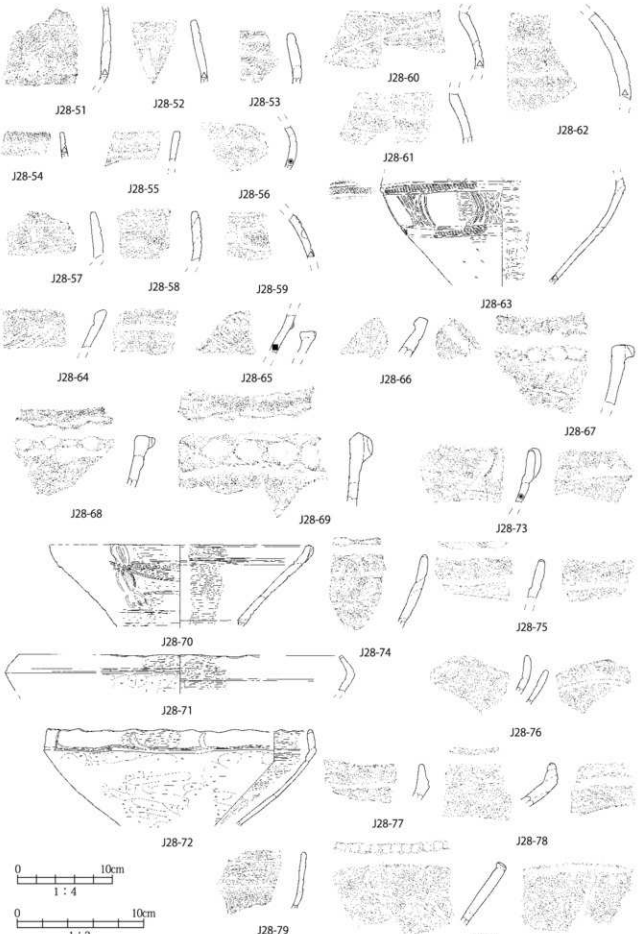


図 136　28 号住居出土土器実測図・拓影（3）

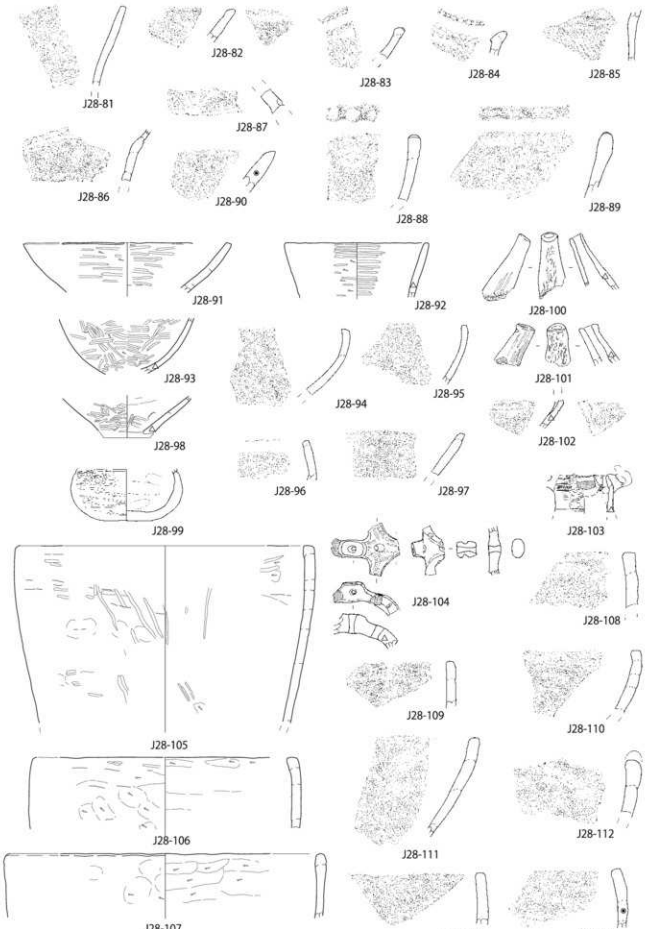


図 137　28 号住居出土土器実測図・拓影（4）

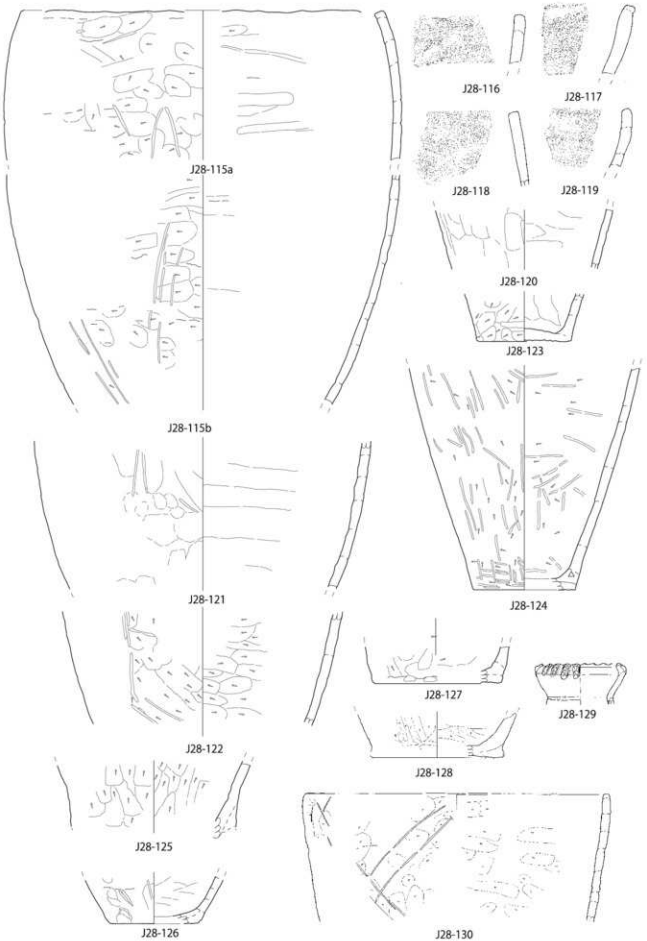


図 138　28 号住居出土土器実測図・拓影（5）

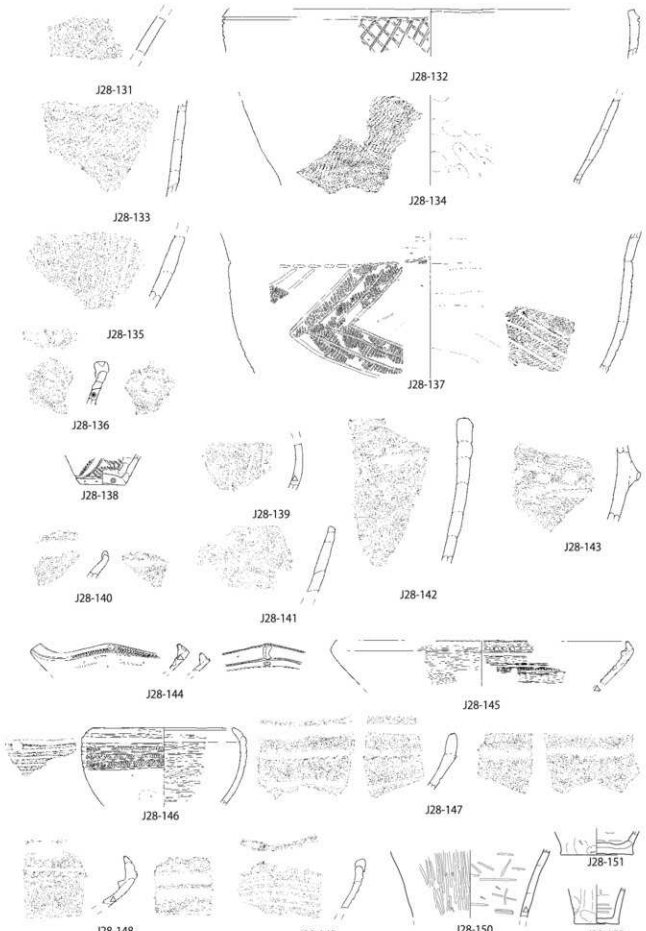


図 139　28 号住居出土土器実測図・拓影 (6)

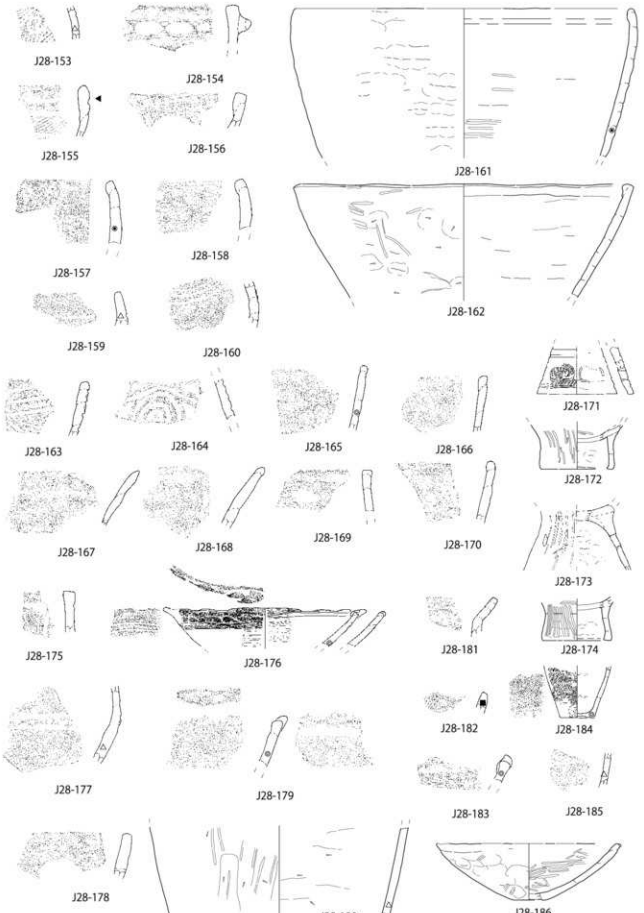


図 140　28 号住居出土土器実測図・拓影 (7)

(22)　28 号住居　[図 133 ～ 140、写真図版 23、24] 【加曽利 B2 式前半～後半】

S36W18 ～ S39W24 の 6 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第Ⅳ層上面で掘り方を平面的に検出し、ほぼ同時に配石 14 が住居埋土中に構築されることと、土坑 274 を切り、土坑 569、土坑 672、埋甕 9 に切られることを平面で確認した。また、床面の調査で住居のピットに切られた土坑 673 を検出した。

南北 4.4m、東西 3.8m の南北に長い隅丸長方形の平面形を呈する。埋土は水平方向には分層できず、ブロック状の埋土だった可能性もあるので、人的な埋め戻しの可能性も考慮しておきたい。壁はほぼ垂直で、壁高は全周 30cm ほどと、エリ穴遺跡では珍しく残りが良い。住居中央の床面は礫が多く、硬化面ははっきりしない。住居中央には長辺 40cm ほどの円礫 4 個を方形に配置した石囲炉が造られる。掘り方は無さそうで、縁石は被熱のためか割れたり風化が著しいが、炉底面に被熱による赤化は見られない。床面で発見されたピットのうち、P1 ～ P5 は 50cm 以上の深さがある。多くは壁に寄った位置に作られ、柱穴の可能性があるだろう。ピット出土として取り上げられた土器が少量あるが、どのピットか特定できない。それ以外は埋土出土で、床面出土かどうかは不明だ。

出土土器は加曽利 B2 式前半が質・量とも優れており、同期に帰属する住居だとしたいところだが、そう断ずるには幾つかの難点が含まれる。

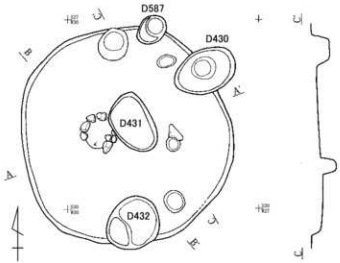
どれか特定できないピット出土土器は小破片ばかりだが、上ノ段式 J28-5 と後期末葉前後の可能性がある J28-6 が含まれる。遺物取り上げのミスの可能性、あるいはそのピットが 28 号住居を切る別遺構である可能性など、解釈の余地はあるが、不都合な事実は消しきれない。

埋土出土の J28-8 ～ J28-63 は、加曽利 B2 式前半八窪遺跡 (塩尻市) 1 号ブロック段階の精製土器・磨消縄文系器種である。同ブロックで一括性が把握された J28-43 ～ J28-63 の屈曲浅鉢の多さが目を引く。J28-64 ～ J28-66 の羽状沈線文系器種は最古相に近く、隆帯文が口縁端部上限に達した関東系の粗製土器 (J28-67 ～ J28-69) と合わせ、同ブロックの一括性を信ずれば加曽利 B2 式前半に帰属する。ここまではよいのだが、精製土器・磨消縄文系器種 J28-70 ～ J28-79、最古相からは若干後続すると思われる羽状沈線文系器種 J28-80 ～ J28-87、隆帯を失った関東系粗製土器 J28-88、J28-89 は、加曽利 B2 式後半石神遺跡 (小諸市)1 号住居段階に帰属する。J28-90 ～ J28-99 の無文精製浅鉢、注口土器 (J28-100 ～ J28-103)、釣手土器 (J28-104)、J28-105 ～ J28-128 の無文粗製深鉢 (J28-127、J28-128 はより後出の可能性を含む) は、前半・後半を問えないが加曽利 B2 式に帰属すると思われ、縦隆帯列深鉢 J28-129、格子目状斜沈線の関東系粗製土器 J28-130 ～ J28-132、全面縄文の異系粗製土器 J28-133、J28-134 も同様だろう。J28-70 以下を加曽利 B2 式前半に限定することはできず、加曽利 B2 式後半の資料は軽視できないことになる。

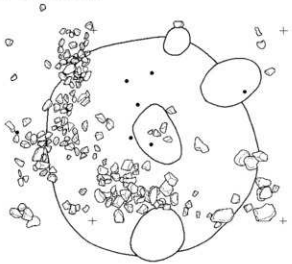
加曽利 B1 式以前の J28-135 ～ J28-154 は大きな破片を含むものの混入品として除外してよいだろう。上ノ段式 J28-155 ～浮線文期の浅鉢 J28-186 は問題だが、上ノ段式と共伴しそうな無文粗製深鉢 J28-161、J28-162 以外は破片が小さく、特定の時期に集中することはない。適切な解釈ができるわけではないが、これらは重視しなくてもよいのではないか。

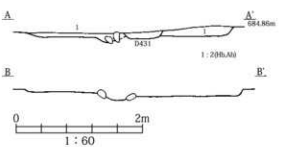
ピット出土土器や上ノ段式以降の土器の問題などの難点を含みつつも、28 号住居は加曽利 B2 式の幅の中に位置づけてよいと判断するが、その前半には限定しきれないだろう。なお、土製品が若干あり、中実の土偶胴部 1 点は 28 号住居の土器のまとまりと整合しそうだが、耳飾 1 点は晩期に属するだろう。

29 号住居

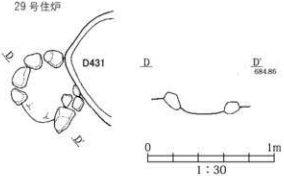


29 号住遺物出土状況





29 号住炉



29 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
29 住									1	2	1	2	3			21		4
	1845								10	20	10	20	110			350		50
S27W27									12	45	13	19	76	11		334	28	93
(29・33 住)	38085								80	780	130	290	1000	280		3300	160	2180
S27W30										24	7	5	16	9		97	2	46
(29 住)	18720									530	230	100	360	240		1330	10	1410
S30W27				2		2	1	1	18	40	8	5	5	7		77	13	52
(29・33 住)	19830			150		40	40	20	250	940	160	160	100	110		1530	130	1460
S30W30									5	25	10	15	5	8		68	5	26
(29 住)	13535								60	460	160	410	90	490		1280	40	1080

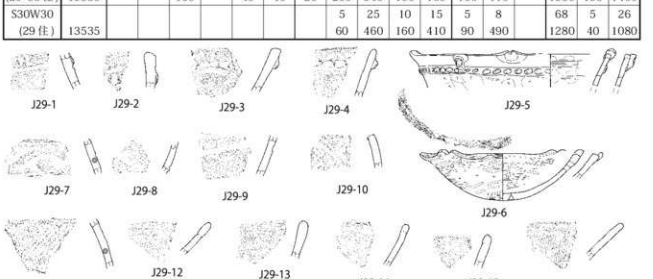


図 141　29 号住居実測図、出土土器実測図・拓影（1）

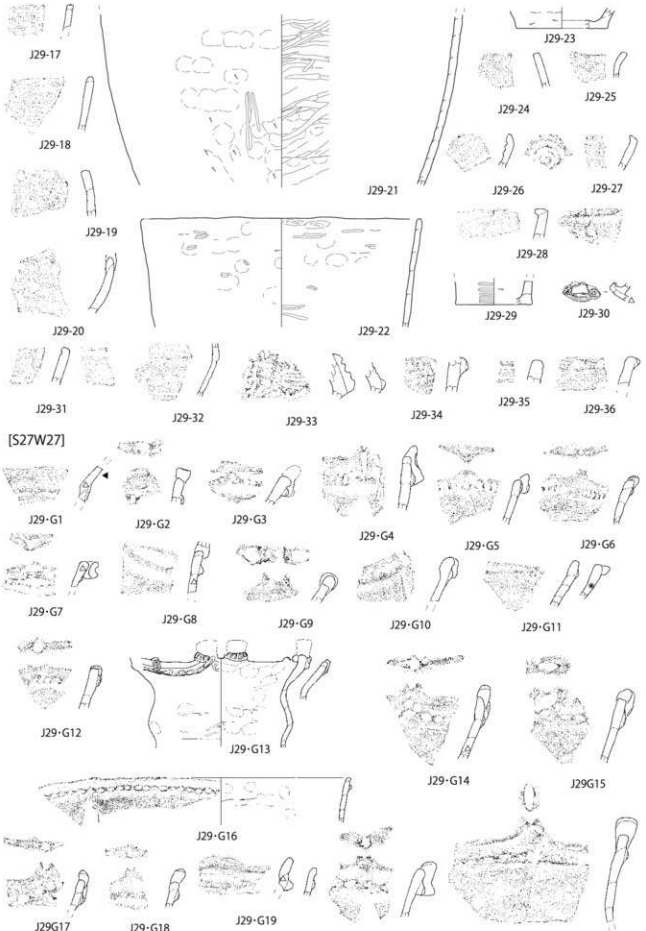


図 142　29 号住居出土土器実測図・拓影（2）、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器・拓影（1）

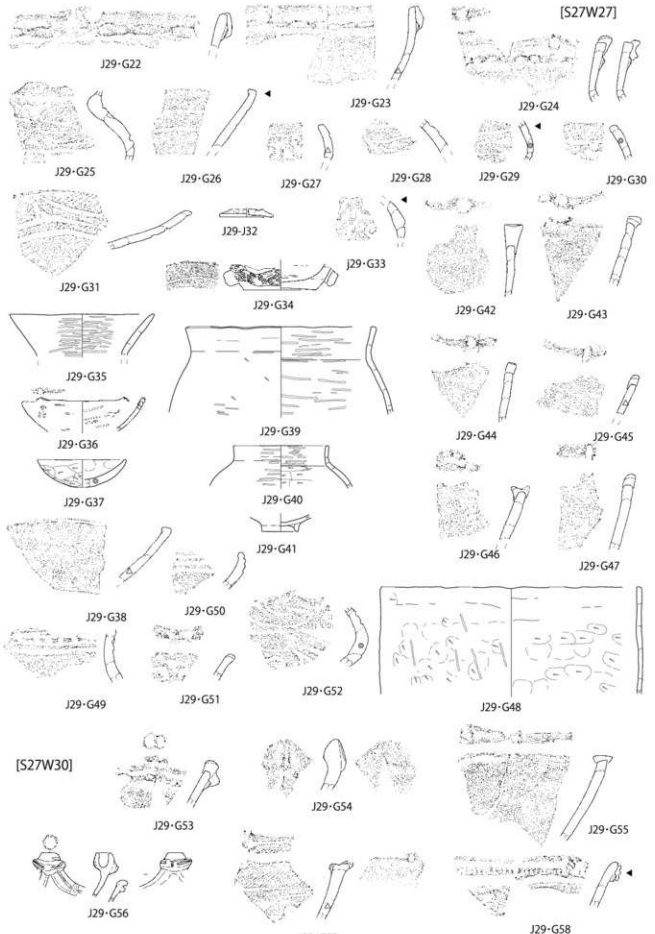


図 143　29 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（2）

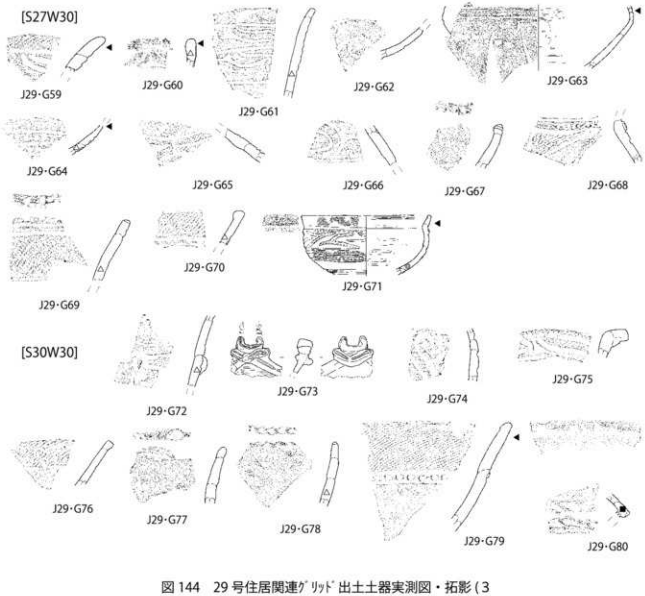


図 144　29 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影 (3

(23)　29 号住居　［図 141 ～ 144、写真図版 24、25］【晩期初頭～佐野 1a 式】

S27W27 ～ S30W30 の 4 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第Ⅳ層上面で、33 号住居に続いて 29 号住居の掘り方を平面的に検出した。29 号住居が 33 号住居を切り、土坑 430、土坑 432、土坑 587 に切られることを平面で確認した。また、床面で 29 号住居の炉の一角が土坑 431 に切られることも確認した。南北 3.5m、東西 3.3m の正円形の平面を呈する。埋土は東辺以外では 10cm に満たず、分層はできなかった。壁はほぼ垂直で、東壁が 20cm あるが、他は数 cm しか把握できなかった。床面らしい硬化面は認められなかった。住居中央やや西寄りには、径 60cm ほどの範囲に、人頭大の円礫 6 個を円形に配置して石囲炉が造られる。炉の北東辺は土坑 431 に切られ、南西辺の礫も失われている。残存する縁石は被熱のためか風化が著しい。炉の中央はわずかに窪み、炉底面は被熱で赤化している。床面で発見されたピットは少なく、いずれもやや浅い。29 号住居出土として取り上げられた土器は少ないが、埋土が浅いので床面付近の出土だろう。

29 号住居出土土器は少量のうえ、大形破片はわずかしかなく、炉等の施設内出土品も無い。堀ノ内式～浮線文土器まで時間幅の広い破片の中で図化できた 4 点は、第 5 段階古相の平縁隆帯文深鉢 J29-5、隆帯文系の口縁突起を採用した無文精製浅鉢 J29-6、隆帯文タイプの整形技法をもつ無文粗製深鉢 J29-21 と J29-

22 だ。相対的に大きいのは中ノ沢 B 類型に関わる破片ばかりであること、時期別個体数・重量表でもこの段階が最大であること、佐野 1a 式より新しいと積極的に評価できる破片は浮線文らしい J29-36 の 1 点のみであること、29 号住居がすっぽり重なる S27W27 グリッドの時期別個体数・重量表でも加曽利 B 期とともに晩期初頭が突出していることなどを併せれば、29 号住居は晩期初頭～前葉 (佐野 1a 式) に帰属することが期待できる。加曽利 B 式土器が多いのは、その時期の遺構か包含層を壊して 29 号住居が構築されたからだろう。一方、中ノ沢 B 類型は第 5 段階が多いものの、第 4 段階の J29-2 もある。入組文・三叉文を持つ土器も、大洞 B2 式の三叉文を描く J29-7 と、大洞 BC 式並行と推測される宮崎遺跡 2 号住居に近い J29-9 が混在するなど、若干の時間幅を内包する。耳飾も 2 点あり、1 点は後期だがもう 1 点は晩期初頭の可能性がある。29 号住居は後代に毀損されて床面だけが辛うじて残り、床附近の遺存資料だけが挟雑物と共に取り上げられたからだと憶測する。29 号住居は晩期初頭～前葉の幅の中に位置づけたい。

29 号住居が含まれるグリッドの中から、晩期初頭～前葉の土器を抜き出して、参考までに図示した。隆帯文土器が特に多い S27W27 では中ノ沢 B 類型第 4 段階と第 5 段階が相半ばし、入組文・三叉文系統も一定の時間幅を有するようで、29 号住居のあり方と整合的である。ただし、J29･G50 ～ J29･G52、J29･G70、J29･G71、J29･G79 など宮崎遺跡 2 号住居より新しそうな土器も存在することには注意されたい。中実の土偶肩部 1 点もこの時間幅の中に位置づけてよさそうだ。

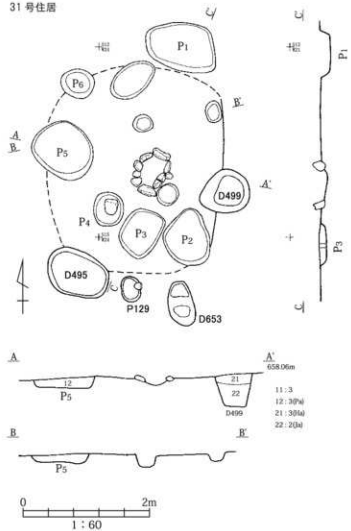
(24) 31 号住居 ［図 145 ～ 148、写真図版 25、26］【加曽利 B1 ～ B2 式】

S9W21 ～ S15W24 の 5 グリッドにかけて位置すると推定する住居である。第Ⅳ層上面で 31 号住居の石囲炉の縁石と配石 26 の礫を検出、続いて住居のピットと、土坑、配石の浅い掘り方を検出したが、住居の掘り方はつかめなかった。精査の結果、31 号住居の P1 が配石 26 の一角を切ることと、土坑 495、土坑 499 が 31 号住居床を切ることを平面で確認した。炉の周囲に床面らしい硬化面はなく、住居範囲は確定できないが、炉を中心にしてピットが配置されると考え、ピットの広がる範囲を住居と見れば、径 4m 程度の広さを持つ可能性がある。住居の中央付近と推定される位置の 60cm × 75cm 程度の範囲に、円礫 8 個を長円形に配置して石囲炉とする。炉中央はわずかに窪み、炉底は被熱で赤化、縁石の多くは被熱のためか風化が著しい。炉とピット内から土器が出土した。31 号住居として取り上げられた土器は、床面出土なのだろう。床面にはピットが幾つか残されるが、いずれも浅い。

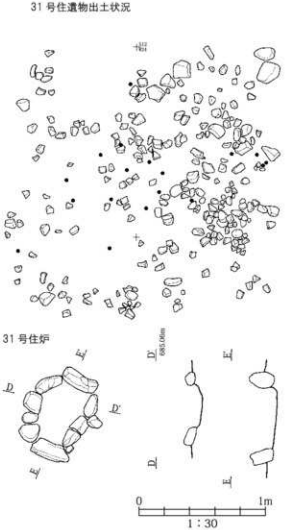
出土土器は量的には加曽利 B 式が他を圧倒するが、弱点もある。炉内出土土器は細片で 1 点ごとに時期が異なる。P1 出土土器のうち破片が大きい 2 点は無文粗製深鉢で、J31-9 は後期中頃、J31-13 は晩期前葉の可能性がある。P3 と P4 で目立つ J31-27 と J31-30 の 2 条の隆帯とそれを繋ぐ突起は、宝ケ峰式の壷形の注口土器の中に散見される装飾の変形かと思われる。住居周辺グリッド出土の J31･G4 は、より宝ケ峰式に近いだろう。P2 の最大破片 J31-22 は加曽利 B2 式の粗製深鉢で、P5 は加曽利 B1 ～ B2 式が大半を占める。だが、P2 ～ P5 のすべてに、小破片ながら晩期隆帯文土器が混じる。施設以外の出土土器で、最多で破片も大きめなのは加曽利 B1 式、次が加曽利 B2 式で、それ以外の時期は小破片で散漫だが、やはり、晩期前葉の土器が混じる。

31 号住居は廃絶後に削平等により損壊され、床面と施設だけしか把握できなかったものと思われる。床に石敷が無かったと断定することもできず、加曽利 B 式期の住居の可能性は否定しきれないだろう。住居の損壊過程で床面付近にまで晩期土器が混入する事もありえたのではなかろうか。不安な点を残すが、31 号住居は加曽利 B1 ～ B2 式に帰属する可能性が高いと判断する。なお、J31-27･J31-30 と J31-82 の類例を住居関連グリッドから抜き出して、参考までに図示した。また、中実の土偶体部が 2 点、耳飾が 4 点出土しているが、より新しい時期の産だろう。

31 号住居



31 号住遺物出土状況



31 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
31 住				1					11	31	7	3	8	7		54	3	32
	10425			20					150	1360	80	30	160	90		1070	30	1170
S12W21		1				1			3	12	6	12	11	10		229	5	75
(31 住)	37360	20				20			10	180	140	260	150	140		2950	40	2540
S12W24		1							11	49	24	17	52	7	1	247	24	105
(31 住)	45680	20							70	680	300	310	1140	110	10	2560	200	3290
S15W21				2			1	1	20	64	31	19	22	28	3	290	21	105
(31 住)	45845			60			10	50	140	1300	520	370	320	280	50	3670	150	2900
S15W24					1	1			10	79	45	19	5	11		173	8	91
(31 住)	36925				30	10			70	1420	1290	260	70	80		2050	70	2080

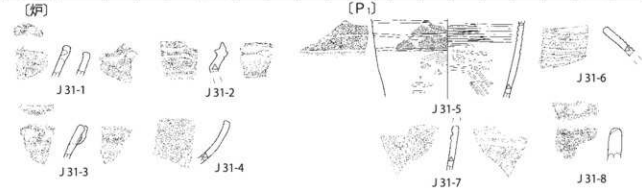


図 145　31 号住居実測図、出土土器実測図・拓影（1）

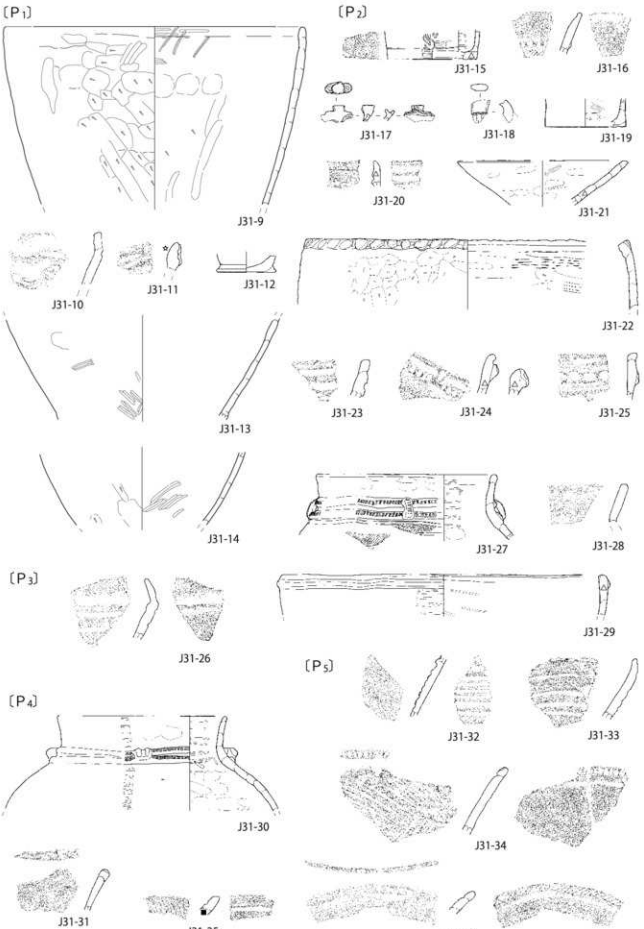


図146　31号住居出土土器実測図・拓影(2)

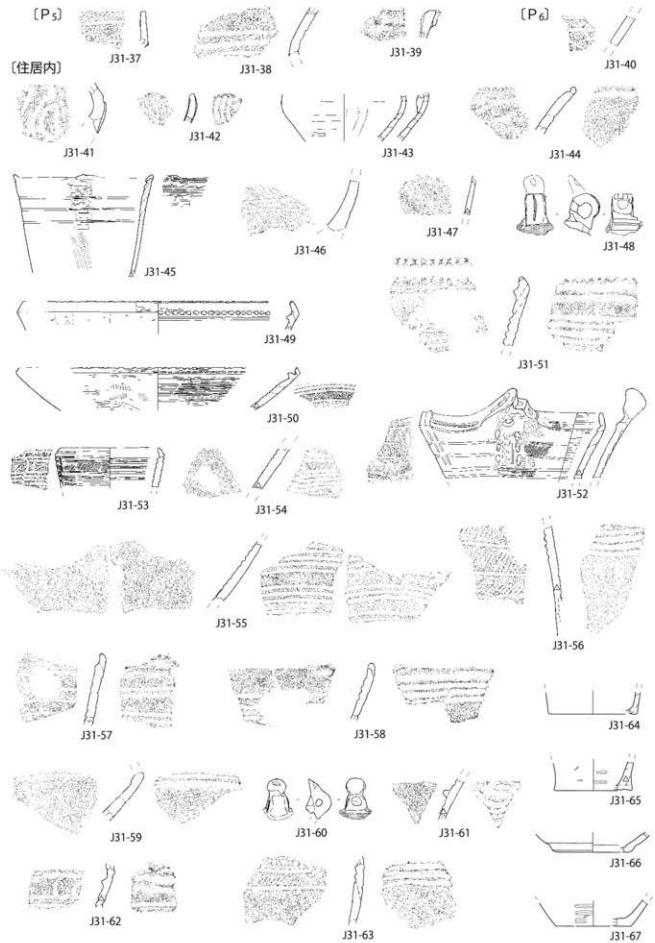


図 147　31 号住居出土土器実測図・拓影（3）

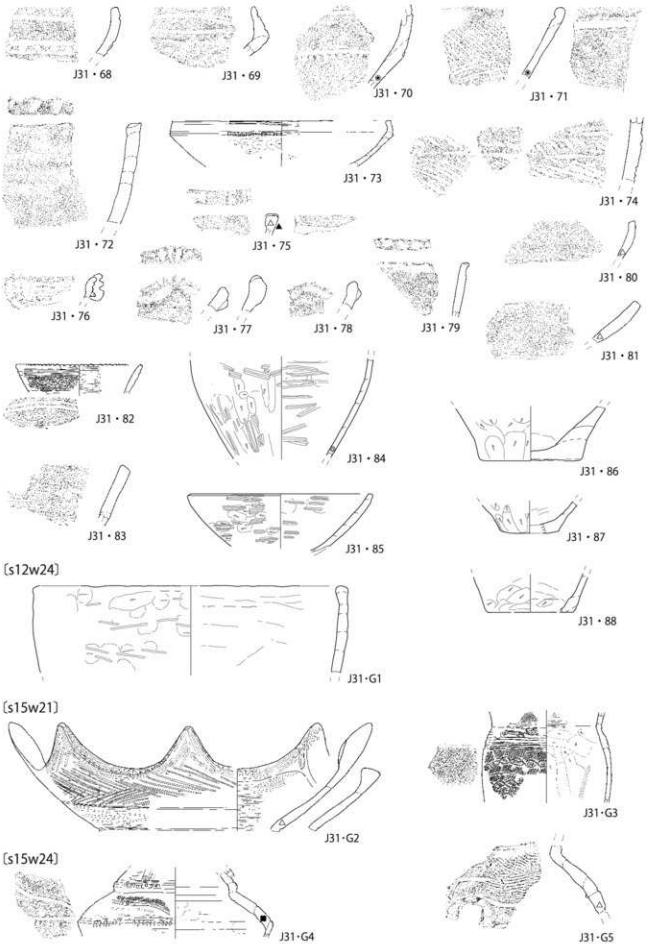


図 148　31 号住居出土土器実測図・拓影（4）、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図

(25)　33 号住居　［図 149 ～ 152、写真図版 26、46］【長野県史・中期中葉】

S27W24 ～ S30W27 の 4 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第Ⅳ層上面で配石 23 を検出、続いてそれを取り囲む 33 号住居掘り方を検出した。さらに 29 号住居、竪穴 4 と土坑、埋甕 3 も検出し、精査の結果、33 号住居の埋土上に配石 23 が乗ることと、33 号住居が、29 号住居、竪穴 4 、埋甕 3、土坑 429、土坑 432 に切られることを平面で確認した。33 号住居は南北 4.7m、東西 3.5m の長円形の平面を呈する。埋土は分層できなかった。壁はほぼ垂直で、20cm ～ 30cm 残る。炉の周囲には床面らしい硬化面が認められた。住居を切る配石 23 の底に伏せて置かれた加曽利 B1 式浅鉢 S23-1 の直下から、焼土に続いて平出 3 A 系深鉢 J33-1 を正位に埋置した埋甕炉が検出された。埋甕内には焼土は無かった。埋甕炉の南側床面は径 50cm ほどが焼けて赤化しており、埋甕炉に先行する炉床の可能性がある。壁際には小規模なピットが並ぶが、深さは 20cm ほどしかない。炉体土器 J33-1 と、記録漏れでどれか特定できない P1 出土の 2 点以外は、33 号住居として取り上げられた。埋土はある程度厚いので、床面近くの出土かどうかは不明だ。

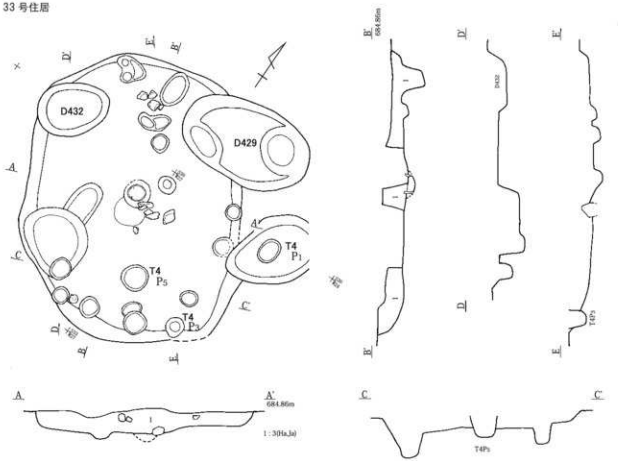
炉体土器 J33-1 が時期決定の最大の根拠である。平出 3A 系深鉢体部で、中期中葉の幅の中に位置づく。P1 出土の浅鉢底部 J33-2 も同様の時間幅と考えられるが、小破片 J33-3 は加曽利 B 式の可能性がある。中期中葉に属する破片は埋土出土の J33-4 ～ J33-12 しかなく、全面縄文施文の J33-18 ～ J33-21 を加えても、少量に留まる。

33 号住居は中期中葉より新しい土器が多い。住居廃絶後の窪みが後代に利用されたのだろう。中期後葉 (J33-13 ～ J33-17) ～後期前葉 (J33-24 ～ J33-31) は小破片だが、後期中葉 (J33-35 ～ J33-47) は出土量が多く、大きめの破片 (J33-40 ～ J33-42 など) は加曽利 B2 式で、無文粗製深鉢 J33-51 も加曽利 B2 式以降の可能性が高い。33 号住居を切る配石 23 は加曽利 B1 式に属するので、これらの破片は配石に帰属するのでもなさそうだ。配石 23 とは別の土坑やピットなど小規模な遺構を発見できなかった可能性があるかもしれない。J33-61 は時期不明の小形の壷もしくは注口土器で、口縁部・底部を欠く。精度は低いが、体部全体に細く鋭い沈線 (櫛歯状工具ではない) を用いて、一般的な文様とは異なった線刻画に類する図柄を描く。これも未検出の小規模遺構に伴った可能性があるだろう。上ノ段式 (J33-48) や晩期初頭型式 (J33-56、J33-57) は破片が小さく散漫なので、遺構の存在は否定的だ。そのほか、後期以降と思われる種別不明の土製品が 1 点出土している。

(26)　34 号住居　［図 153、写真図版 27］【長野県史・中期中葉Ⅲ期】

S9W39 ～ S15W42 の 5 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第Ⅳ層上面で配石 6 を検出し、続いてその下から 34 号住居の掘り方と、土坑 34、土坑 83、土坑 388、土坑 504、P3、谷状低地縁辺を平面的に検出した。精査の結果、34 号住居が切り合う遺構全てと谷状低地に切られることを確認した。谷状低地にも切られるとの調査所見であるが、第Ⅱ章第 1 節で述べたとおり、住居北辺が第Ⅲ層中に構築され、廃絶後に浸食作用で喪失したと考えるべきで、調査時の所見を変更する。遺構図は訂正しようがないので、旧見解のままとするが、結果的に誤った図にはなっていない。住居は南北 3.3m 以上、東西 4.5m の円形基調の平面形を呈すると推測する。埋土は壁際から急傾斜で分層できるので、短期間の埋没か意図的の埋め戻しの可能性があろう。壁はほぼ垂直で、壁高は最も高い南辺で 30cm ほど残る。床は住居中央に硬化面が認められる。住居ほぼ中央と推測される辺りに、径 40cm、深さ 10cm の窪みを造り、その縁辺に長辺 20cm ほどの円礫を配置して石囲炉を構築する。円礫は 6 個で、内 4 個は風化してぼろぼろに崩れているが、炉の底面は赤化していない。壁際に寄ってピットが 5 基配置されるが、いずれも深く、柱痕跡が残るものもあって、柱穴の可能性が高い。住居出土土器は少なく、炉など施設内出土土器は無い。住居出土として取り上げられた土器は、床面出土かどうかは不明だ。

33 号住居



33 号住遺物出土状況

33 号住炉

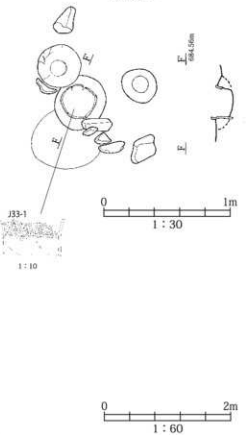


図 149　33 号住居実測図

33 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
33 住				1	6		12		12	24	5		4	4		36	1	28
	12450			10	170		1210		150	1810	30		80	50		600	20	410
S27W24			1	3			1		47	36	8	4	6	11	1	129	3	72
(33 住・竪 4)	32200		30	90			20		520	660	160	110	150	240	100	2220	20	2580
S27W27									12	45	13	19	76	11		334	28	93
(29・33 住)	38085								80	780	130	290	1000	280		3300	160	2180
S30W24				2					30	10	2	7	4	18	3	119		64
(33 住・竪 4)	27755			50					390	340	10	130	80	280	40	1850		3030
S30W27				2		2	1	1	18	40	8	5	5	7		77	13	52
(29・33 住)	19830			150		40	40	20	250	940	160	160	100	110		1530	130	1460

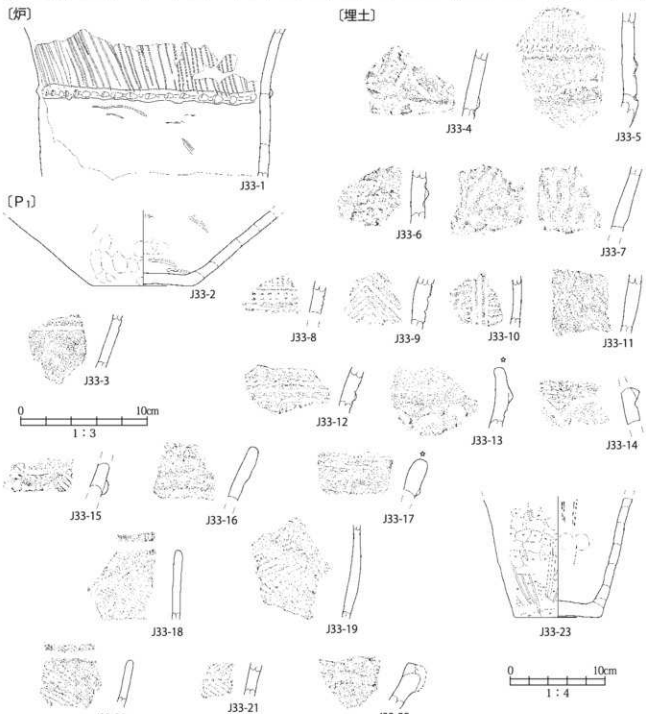


図 150　33 号住居出土土器実測図・拓影 (1)

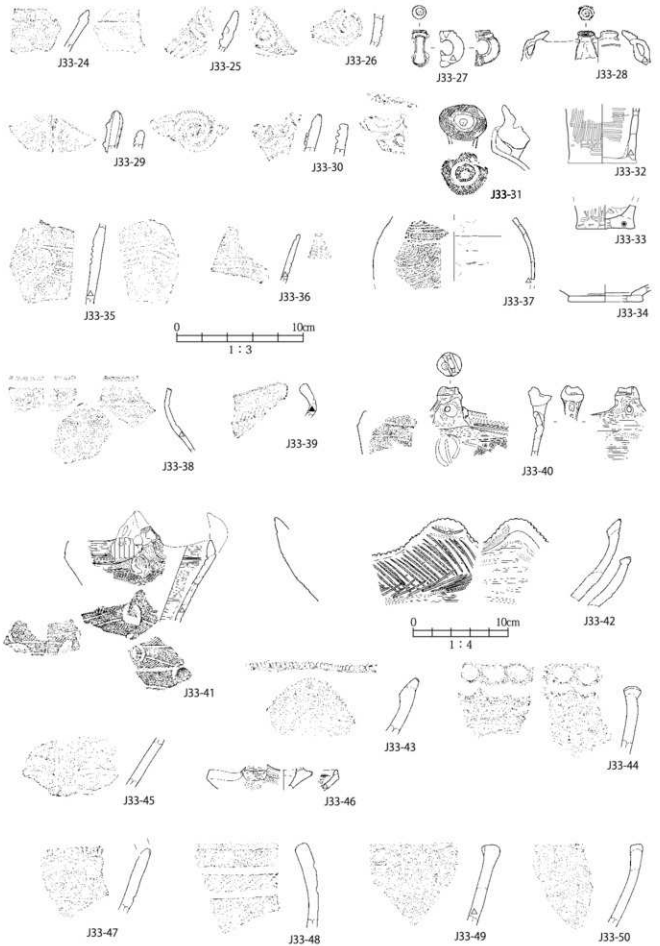


図 151　33 号住居出土土器実測図・拓影（2）

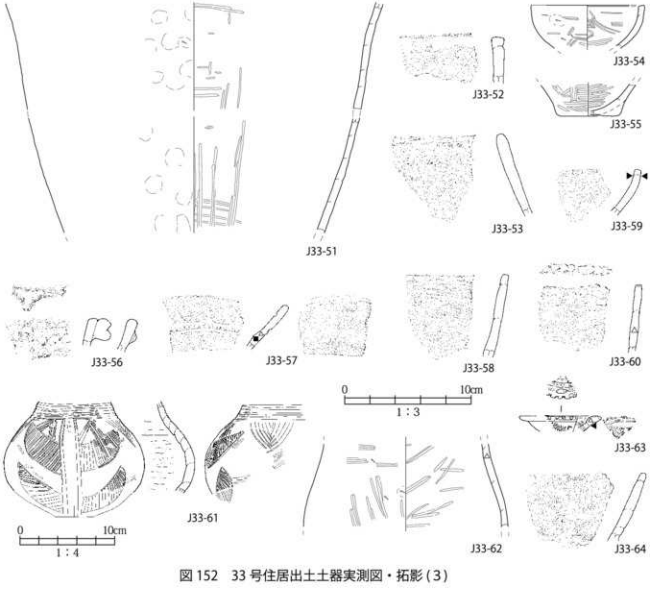


図 152　33 号住居出土土器実測図・拓影（3）

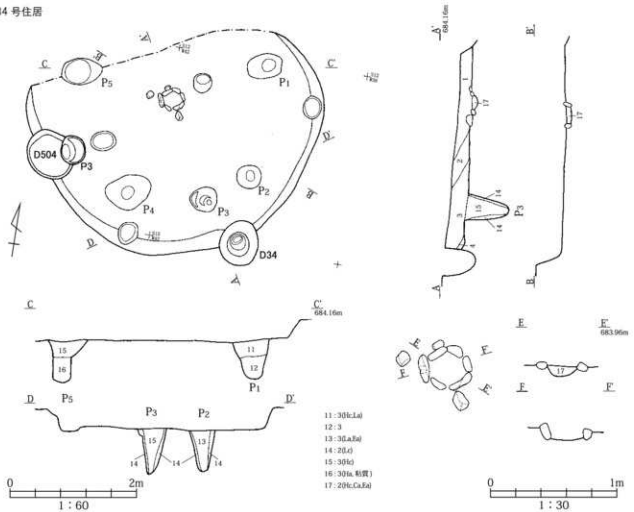
大形破片は図示した 2 点のみで、いずれも中期中葉Ⅲ期と推測される。34 号住居は中期中葉Ⅲ期に属すると判断する。

(27)　35 号住居　［図 154、155、写真図版 27、28、46］【長野県史・中期後葉Ⅲ期】

N30W3 ～ N24W6 の 5 グリッドにかけて、谷状低地の北半に位置すると推定される住居で、中心は N27W3 である。谷状低地の北半の土層堆積状況は、谷状低地南縁とはかなり異なる。谷状低地を埋める第Ⅲ層下位で土器の大破片を発見、その下の第Ⅳ層上面で 35 号住居の炉縁石を検出し、周辺を精査してピット群も検出した。床面らしい硬化面は判然とせず、掘り方も検出できなかったが、炉を含めて第Ⅳ層上面に構築された住居である。周囲には遺構はないので、ピット群もこの住居の施設だと判断し、住居の範囲を径 4m 程度と推定した。住居中央と推測される辺りに、50cm × 80cm 程の浅い窪みを造り、周囲に人頭大ほどの円礫を配して石囲炉とする。縁石は 9 個残っているが、2 個ほどは喪失したと思われる。残存する縁石の一部は被熱で風化していた。ピット 6 基は炉を取り囲むように配され、残存する深さは 10cm 程度だった。

35 号住居出土として取り上げられた土器は微量しかないが、N27W3 グリッド出土の大形破片 (J35-1、J35-2) は 35 号住居の炉縁石の上で発見された土器だと思われる。グリッド出土土器は唐草文系土器が主

34 号住居



34 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
34 住		2				2	2		7		3	3	13			21	5	9
	9435	2080				80	40		70		40	40	280			250	40	980
S12W39				2		1	4	1		5	2		3	11	1	70		52
(34 住)	25210			110		70	210	30		80	30		30	1650	10	2880		4840
S12W42				2				1	1	6	4	2	8	5	3	44	5	32
(34 住)	17130			60				20	20	100	30	20	130	60	50	3110	40	1410
S15W39				1			1		3	5	5	5	8	9	2	68	3	36
(34 住)	14375			10			20		30	110	80	110	110	150	100	1080	20	1350
S15W42			2	2		3	5	1	1	6	10	3	10	4		52		29
(34 住)	11900		90	30		200	170	10	10	190	170	110	110	60		830		1100

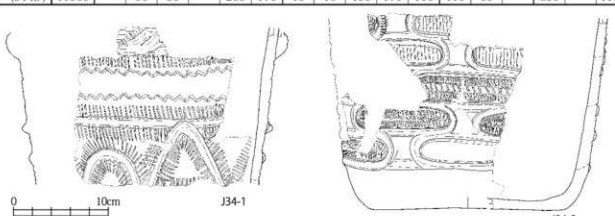


図 153　34 号住居実測図、出土土器実測図

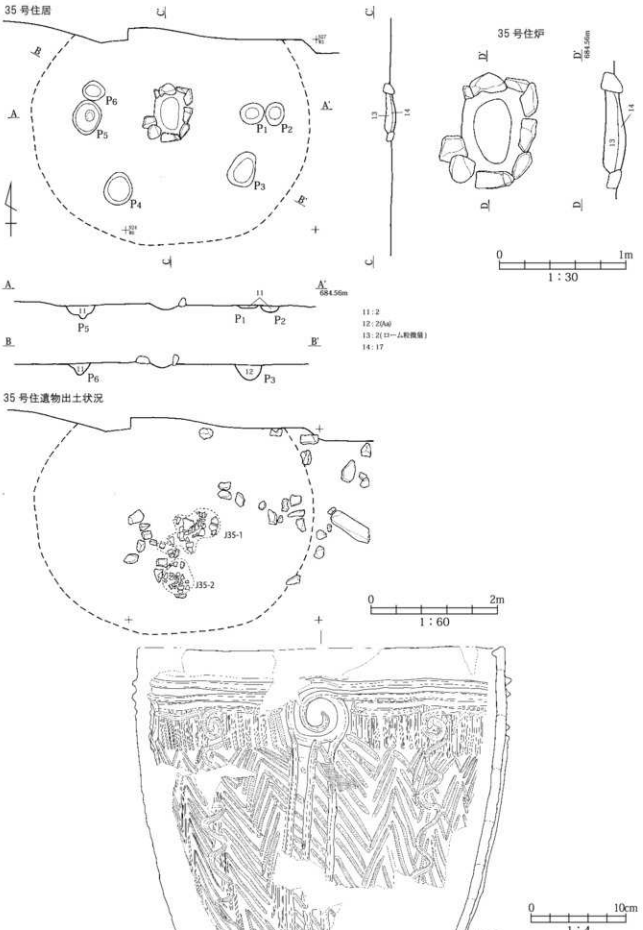
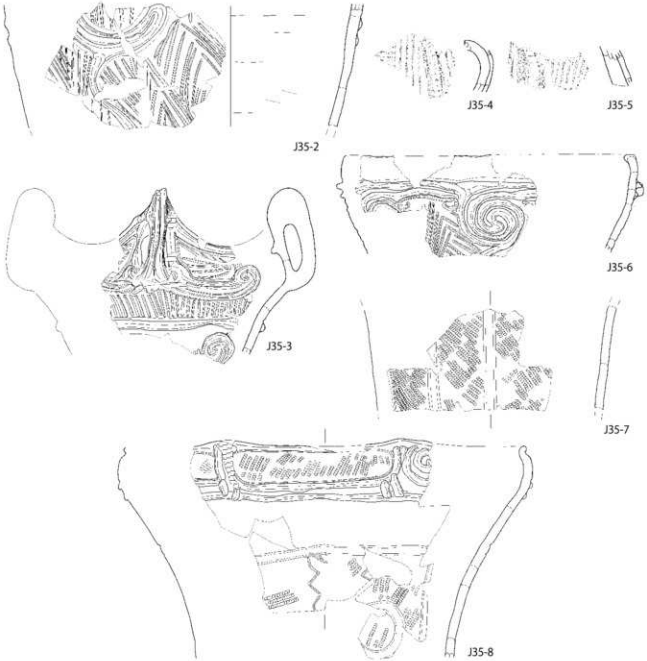


図 154　35 号住居実測図、出土土器実測図（1）



35 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）　[] は選択された特定個体のみの数値

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加 E	不明	底部	称名	堀内	加 B	上段	中 K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
35 住	710																	
N24W3	2705																	
N24W6	255						[1] [70]						[1] [30]	[1] [10]				
N27W3	21030	[3] [70]		[10] [3580]	[6] [1520]	[3] [80]	[7] [790]			[2] [50]								[2] [340]
N27W6	3675								[1] [20]									[1] [40]

図 155　35 号住居出土土器実測図（2）

体を占める中に、加曽利Ｅ式系 (J35-7、J35-8) が加わる構成で、主要な個体のみ図示した。唐草文系では J35-3 のみ中期後葉Ⅱ期の可能性があるが、それ以外は中期後葉Ⅲ期の産だと推測する。加曽利Ｅ式系も中期後葉Ⅲ期だろう。35 号住居は中期後葉Ⅲ期に属すると判断する。中期後葉には谷状低地の一角が居住地として利用された。

整理作業上の手違いから、35 号住居の時期別個体数・重量表は実測・拓本対象個体だけの数値しか掲載できなくなった。出土全点を対象とすることが困難になったことをお許し頂きたい。

(28)　36 号住居　［図 156 ～ 159、写真図版 29、46 ～ 48］【上／段 3 式】

S0W3 ～ S3W9 の 6 グリッドにかけて位置すると推定される竪穴住居であるが、S0W3 と S3W3 は調査対象範囲外で、住居の東側 1/3 ほどは対象外となった。第Ⅳ層上面で、炉 2 の縁石を検出、続いて弧状に並ぶ拳大の礫や略完形土器などを発見、土坑 217、土坑 219、土坑 220 を検出した。略完形土器は土坑には帰属しないので、別遺構の存在を推測し、調査区域東限の壁で堆積状況を精査した結果、36 号住居の壁の立ち上がりを発見した。住居掘り方は第Ⅲ層上面近くから確認できたが、平面的な調査は既に床面付近に達しており、掘り方の検出はもはや不可能だったので、壁の断面所見から住居の南辺と北辺を推定した。西辺は無傷で残る炉 2 よりも東側で、礫の列の末端付近だと推定した。土坑 3 基は住居の埋土中で検出したので、36 号住居はそれらに切られると判断できた。掘り方を平面的に把握できなかったので、36 号住居の平面形は不明だが、推定範囲は南北 5m 前後、東西 4m 以上で、最大 6m 前後になる可能性もある。調査区域東限の壁で観察できた 36 号住居の構築状況は、第Ⅲ層上面で掘り方が検出でき (より上位の第Ⅰ層中から掘り込まれた可能性は残る)、第Ⅳ層上面付近まで掘り込んで床を構築したと判断できた。埋土は床面直上の薄い層 (3 層)、その上に壁際が分厚く中央が薄い層 (2 層)、最後に住居中央に堆積する分厚い層 (1 層) の 3 層に分層される。レンズ状の堆積の一種で自然埋没を示すとも言えるが、2 番目の層の壁際の厚さを見れば、意図的な埋め戻しの可能性も考慮しないわけにはゆかないだろう。壁の立ち上がりはやや緩く、壁高は 30cm 程度あるが、これは旧地表からの掘り方としては浅い。住居の床面は平坦ではなく、中央が壁際より 10cm ほど深く、壁際の床が若干高く作られ、境界には低い段差ができている。その段差は南辺では平面的にも断面でも確認でき、西辺では段差の縁に拳大の礫が並び、北辺では段差は不明瞭だがその延長に拳大の礫が弧状に並んでいた。住居検出のきっかけとなった礫の列がこれだ。やや低い住居中央部分と、少々高い住居外周部分とが、段差で区分けされた構造が読み取れる。この外周部分に礫を配置した形跡は無いので、中越遺跡の方形石囲住居とは少々異なるようだ。住居の平面形に従って段差やその延長が作られたのなら、住居の平面形は円形を基調とすることが推測できる。住居中央部分は 3 基の土坑に切られて、住居のほぼ中央に位置すると推定される炉も 1/3 ほどを失っている。炉は二重構造のように見受ける。中心には径 40cm、深さ 15cm ほどの小さな掘り方を設け、その縁から 10cm ～ 20cm の空白を置いて、人頭大程度の礫を並べ、礫の外側にもやや小ぶりの礫を詰める。控えを付けた炉縁石、或いは炉縁石に連続する石敷きとでも表現できようか。石敷きの範囲は南北 150cm、東西 100cm 以上で、掘り方はない。敷石住居や環礫方形配石遺構などの系譜に連なるのか、多重の石囲炉に関わるのか、判断は難しい。炉中央の掘り方の底面は焼成痕跡は無かったが、側面が若干赤化し、中には人頭大の円礫 2 個が入っていた。縁石の一部は被熱で風化が進んでいた。小ピットが幾つか存在するが、深さは 20cm 程度である。

住居平面の検出が遅れたため、住居出土として取り上げられた遺物は、床面直上かそれに近い位置からの出土である。グリッドで取上げられた土器のうち、J36･G2、J36･G3、J36･G7、J36･G12、J36･G13、J36･G15 も、取り上げレベルは床面付近であった。S0W6、S3W6 出土遺物の大半は、位置関係から見て 36 号住居埋土から出土したと推測できるので、主要な個体を図示した。

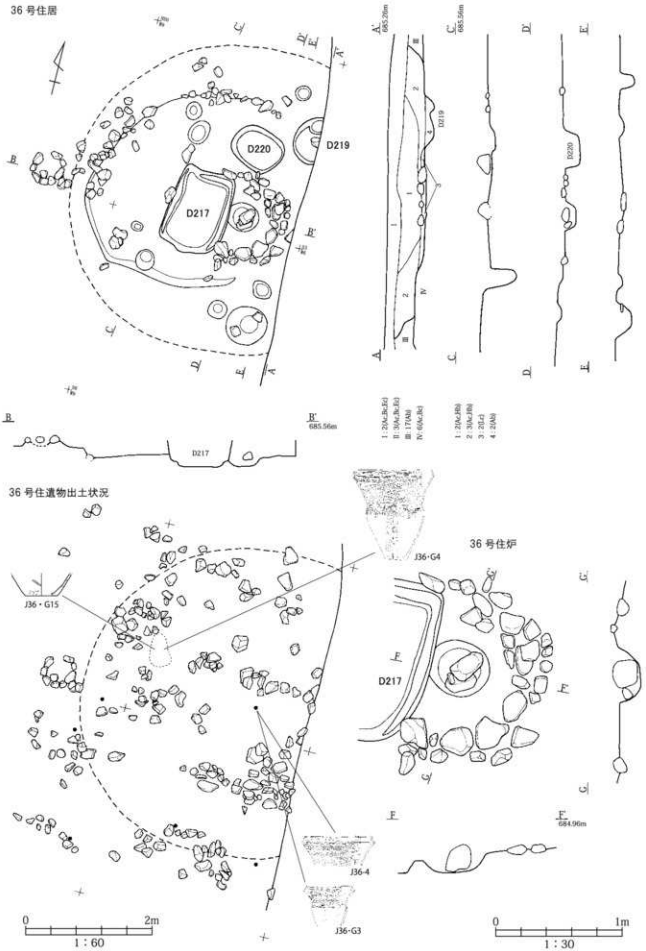


図 156　36 号住居実測図

36 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
36 住				2	1			1	3	5	14	3		2		23	5	3
	5795			30	30		500	30	30	260	3300	110		30		740	110	140
0W6				9	6			1	27	19	35	19	4	9	1	109	9	45
(36住・炉2)	34870			250	130			20	530	180	510	310	50	110	10	2130	200	1520
0W9				3	6			5	27	26	46	42	52	8		231	25	164
(36住・炉2)	54720			50	150			150	620	340	920	870	940	120		5710	330	4730
S3W6		2	1	15	4			6	28	9	18	12	10	7	5	140	24	81
(36住・炉2)	36460	50	10	540	120			150	470	110	370	180	230	180	140	1840	190	2350
S3W9		2	2	23	6			4	36	15	11	20	28	22		131	23	108
(36住・炉2)	39050	10	50	1030	210			110	490	170	160	350	570	310		2150	260	4280

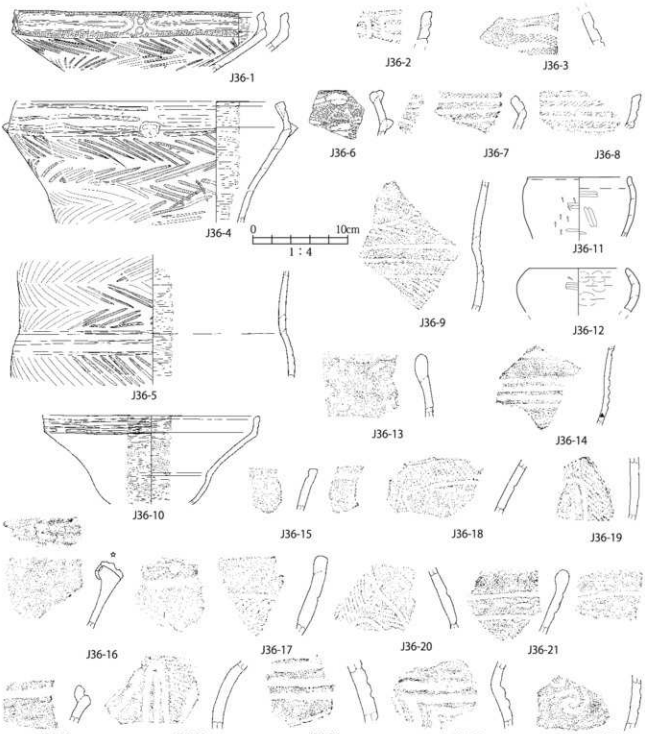


図 157　36 号住居出土土器実測図・拓影（1）

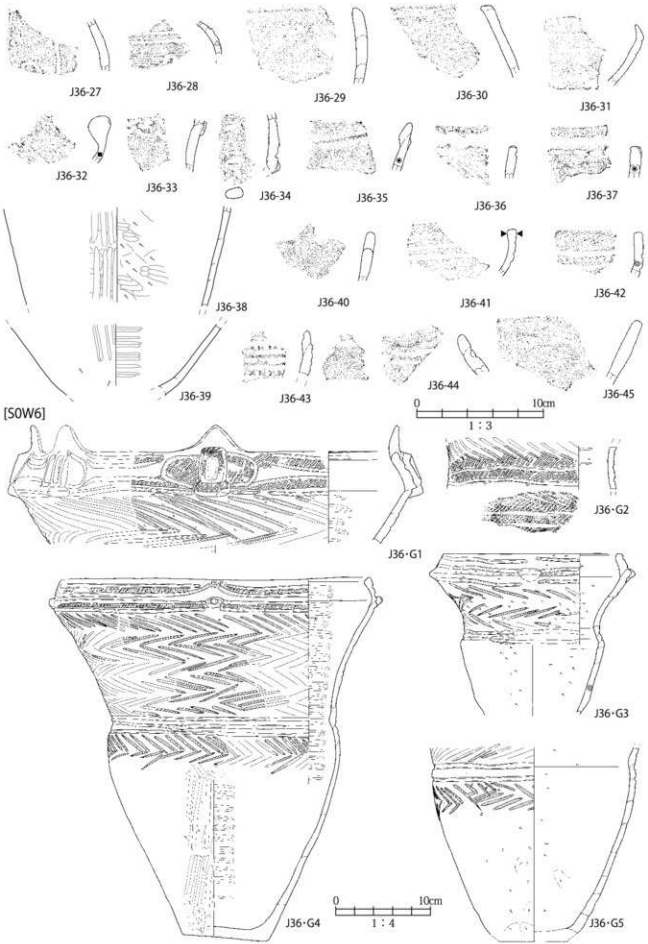


図 158　36 号住居出土土器実測図・拓影（2）、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図（1）

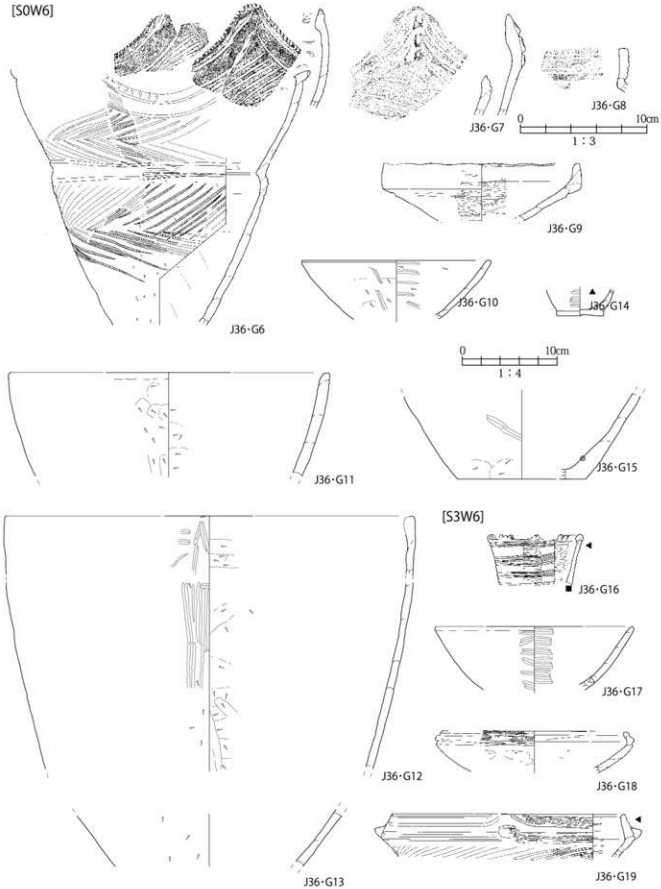


図 159　36 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図（2）

36 号住居として取り上げられた土器のうち、破片が大きく量も多いのは上ノ段式である。J36-1 ～ J36-3 の 3 点は上ノ段 2 式、J36-4 ～ J36-6 の 3 点は上ノ段 3 式、J36-7 ～ J36-10 の 4 点も確定しきれないものの上ノ段 3 式の可能性が高い。無文浅鉢 J36-11、J36-12 と無文粗製深鉢 J36-13 も上ノ段式の構成要素と思われる。巻貝条痕を持つ J36-14、内面沈線の J36-15 は東海系譜の可能性があるが、上ノ段式に並行しそうだ。中期中葉 J36-16 ～加曽利 B2 式 J36-32 までの小破片は混入品としてよいだろう。J36-33 ～ J36-43 の小破片は上ノ段式に後続する中ノ沢 K 式～佐野 2 式で、住居埋土の純度は少々問題があろう。後期後葉の耳飾も 1 点あるが、上ノ段式期に遡ることはないだろう。

S0W6、S3W6 出土土器では、J36･G1 は上ノ段 2 式か 3 式、J36･G2 は上ノ段 3 式か 4 式、J36･G7 は上ノ段 4 式、J36･G3 ～ J36･G6、J36･G8、J36･G9 は上ノ段 3 式である。注口土器 J36･G8、J36･G16、無文粗製深鉢 J36･G11 ～ J36･G13、浅鉢 J36･G10、J36･G17 も上ノ段式の構成要素だろう。J36･G9 は上ノ段式直前か。ただし､J36･G15 は佐野式の無文粗製土器の可能性があり､炉 2 に帰属するかも知れない。

多少の挟雑物はあるが、36 号住居は質・量とも圧倒的な上ノ段 3 式に属すると判断する。19 号住居でも比較材料とした方形周石住居は、住居の範囲を列石で示す [新津 1992] のが基本的特徴らしく、方形が基調だが例外もあり、後期後葉には成立して晩期に継続するようだ。36 号住居も方形周石住居との共通性がある住居だと言えそうで、時間的にも整合的だろう。

(29)　37 号住居　[図 160] 【中期後半～後期前葉】

N3E9 ～ N9E12 の 6 グリッドにかけて位置すると推測される住居だが、N3E9 と N3E12 は調査対象範囲外で、住居の南側 1/2 ほどは対象外となった。第Ⅳ層上面から第Ⅴ層上面で遺物のまとまりと敷石の素材の可能性がある板石 10 枚程度を発見、精査の結果、板石や遺物を取り巻くように半円形に並ぶピットを検出して、37 号住居の存在を推定した。包含層は薄く、床面も不明瞭、径 30cm、深さ 30cm 程度のピット 5 基 (P1 ～ P5) も認定に不安があるが、住居が存在した可能性は高いだろう。

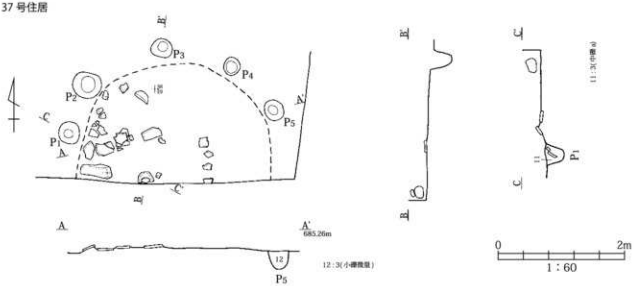
住居出土として取り上げられた土器は、床面付近からの出土だと思われるが、細片ばかりで量も少ない。敷石住居成立以前と思われる中期中葉以前の J37-1 は混入品、敷石住居消滅後の後期中葉以降の J37-9 ～ J37-12 も混入とせざるを得ない。中期後半連弧文系 J37-3、称名寺 1 式 J37-4、後期前葉の可能性がある羽状縄文をもつ J37-5、堀ノ内式の J37-6 ～ J37-8 などが帰属候補だが、細片に過ぎ時期決定の根拠にはなりそうもない。37 号住居は中期後半～後期前葉の幅の中に属するとせざるを得ない。

周辺グリッド出土土器は中期前葉～晩期中葉と幅があるが、後期末葉～晩期前葉が最も多い。谷状低地周辺の廃棄場の末端に相当している可能性があり、土器の大半は廃棄場に帰属する可能性があるので、第 2 分冊で報告する。また、整理作業上の手違いから、37 号住居の時期別個体数・重量表は実測・拓本対象個体だけの数値しか掲載できなくなった。出土全点を対象とすることが困難になったことをお許し頂きたい。

(30)　38 号住居　[図 161 ～ 164、写真図版 29、30、48]　　【堀ノ内 2 式後半】

S24W18 ～ S30W21 の 7 グリッドにかけて位置する住居である。第Ⅳ層上面で 38 号住居の石囲炉の縁石と床面の礫、多数の土坑を検出、精査して 38 号住居の掘り方を検出した。切り合う土坑は土坑 307、土坑 310、土坑 313、土坑 314、土坑 328 ～土坑 330、土坑 353、土坑 354、土坑 422、土坑 425、土坑 426、土坑 561、土坑 713 の 14 基で、その全てに切られることを平面で確認した。住居主体部の掘り方は南北 4.5m、東西 4.2m の卵形の平面形で、残存する壁高は 5cm ～ 10cm に過ぎないが、何とか全周を検出できた。床面近くでの検出の為、埋没状況は把握できなかった。床面らしい硬化面は把握できず、かといって床に石敷きが為された痕跡も掴めなかった。住居中央に石囲炉が構築されるが、半分は土坑 314 と土坑

37 号住居



37 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）　[] は選択された特定個体のみの数値

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加 E	不明	底部	称名	堀内	加 B	上段	中 K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
37 住	1435		1 50						2 60		1 30		1 10				1 20	
N9E12 (37 住)	12370						[1] [110]		[2] [20]	[4] [70]	[1] [30]	[9] [220]	[8] [180]	[2] [50]		[2] [100]	[2] [50]	
N9E9 (37 住)	6350			[2] [80]						[1] [10]	[3] [40]	[5] [110]	[7] [150]			[1] [70]		
N6E12 (37 住)	785	[2] [40]			[1] [70]				[3] [150]	[2] [60]	[1] [10]	[1] [30]	[6] [220]					[2] [580]
N6E9 (37 住)	2630				[1] [70]					[1] [50]			[1] [20]				[1] [60]	

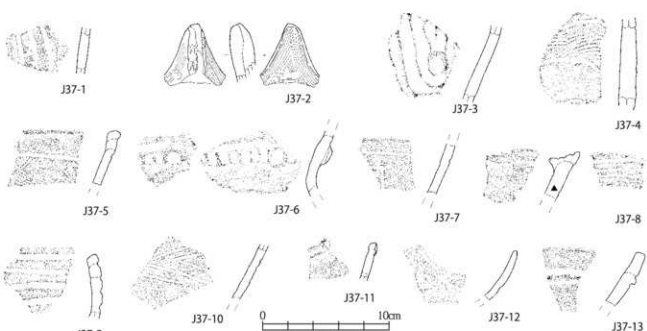
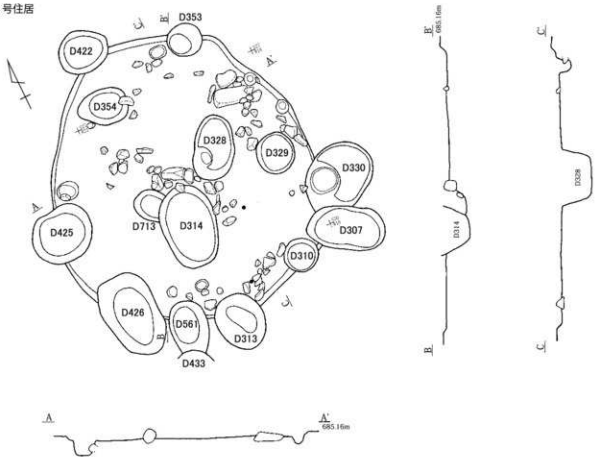
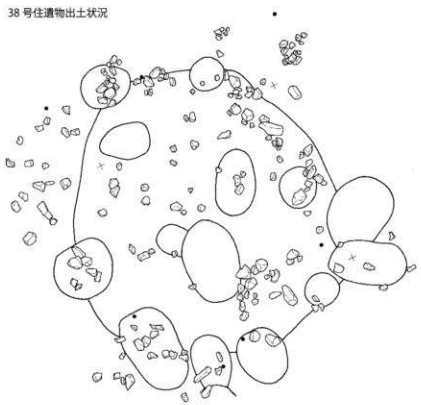


図 160　37 号住居実測図、出土土器実測図・拓影

38 号住居



38 号住遺物出土状況



0　2m
1：60

図 161　38 号住居実測図

38 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
38 住				2		3	1	1	12	3		1	2	1		13		12
	4715			110		30	50	20	1000	60		10	30	30		430		620
S24W18				5	3		3		5	3	1	1	4	19	2	77	8	35
(38 住)	14615			330	80		210		40	30	10	40	50	210	20	900	60	1230
S27W18		1		1			2		19	5		4	9	19	1	72	8	66
(38 住)	20425	20		20			90		280	80		50	150	280	30	1140	80	2050
S27W21				2					46	23	9	10	10	30	5	114	8	91
(38 住・竪 4)	30800			20					830	520	150	320	90	730	100	2560	140	3730
S30W18				1	1	2		1	7		1		5	10		43	3	26
(38 住)	12970			10	20	90		50	170		10		50	140		900	70	1870
S30W21				2			4		3	2	8		1	5	1	15	2	9
(38 住・竪 4)	7125			100			210		300	10	220		50	610	20	210	10	910

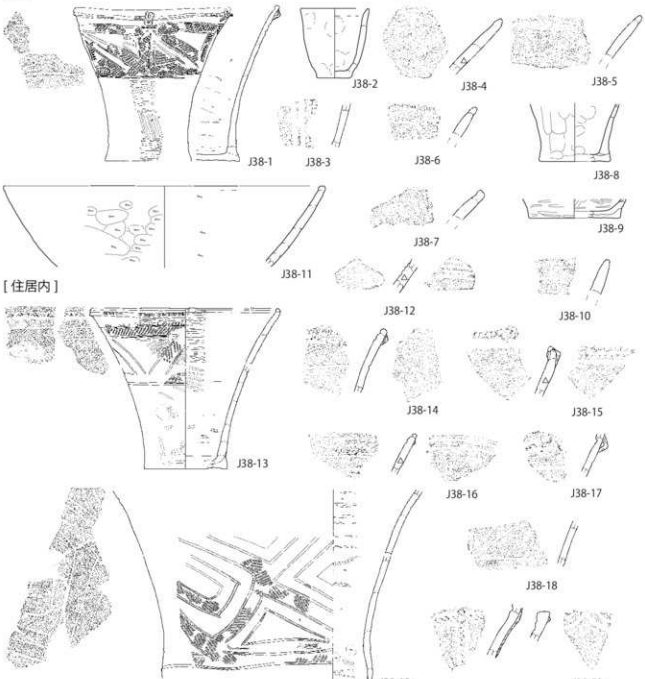


図 162　38 号住居出土土器実測図・拓影 (1)

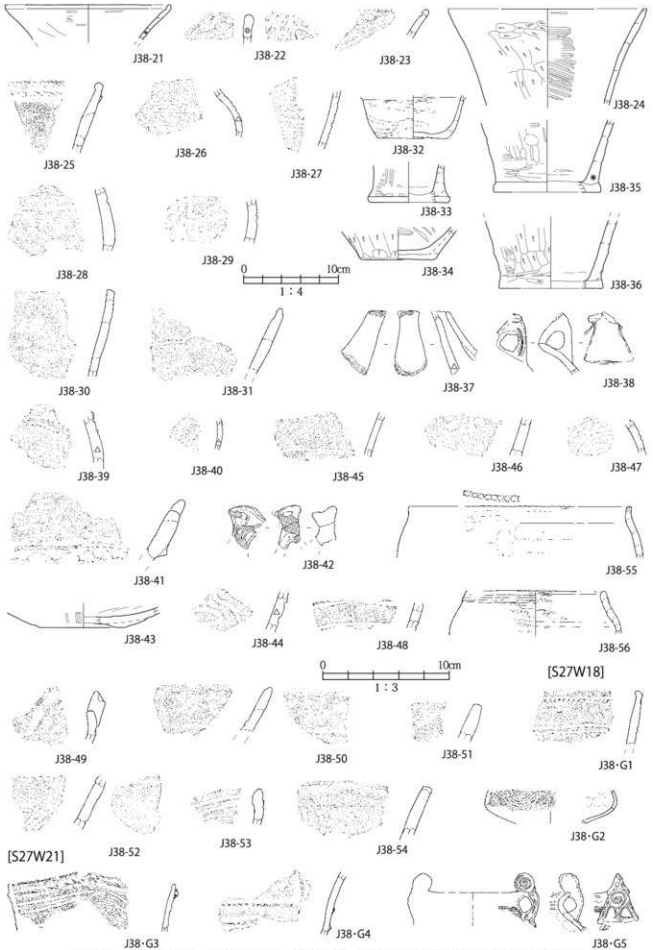


図 163　38 号住居出土土器実測図・拓影（2）、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（1）

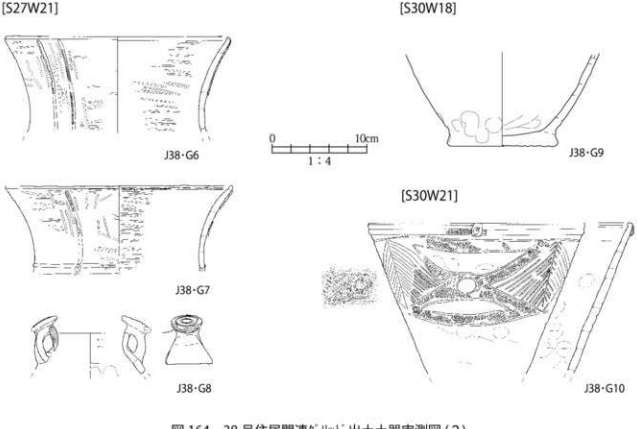


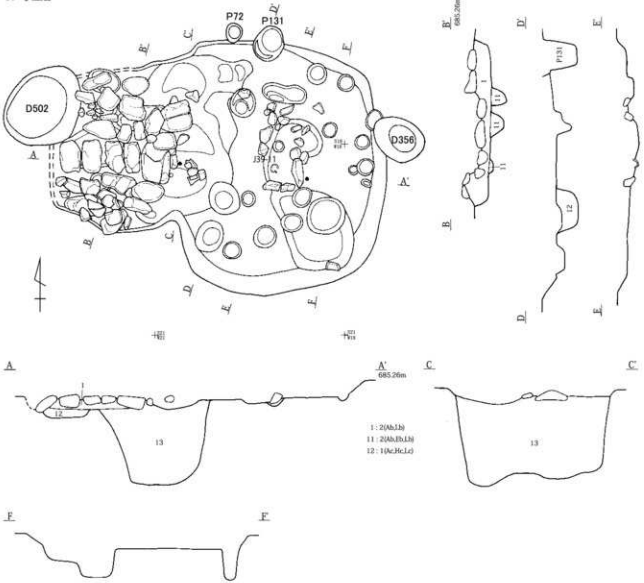
図 164　38 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図（2）

713 に切られて失われていた。その構造は、北西―南東 80cm、北東―南西 20cm 以上、深さ 30cm とやや深い掘り方の周囲に、人頭大～長辺 40cm ほどの円礫を配置する石囲炉で、炉内に焼土は認められなかったが、縁石の一部は被熱による風化が認められた。北東辺の壁際には長辺 50cm 以上と大形の円礫を中心に数個の礫がまとまって存在した。出入り口施設の痕跡は発見できなかったが、複数の土坑に切られて掘り方のほとんどが失われている南東辺か南西辺に、出入り口施設が設けられた可能性はあり、柄鏡形敷石住居の可能性も残る。床ではピットなどは発見できなかった。遺物は炉内及び床面出土として少量の土器が取り上げられたほか、38 号住居出土として取り上げられた土器がひとまとまりあり、これらも床面近くからの出土だろう。

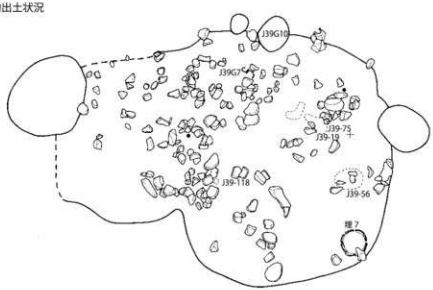
炉内出土の土器 J38-1 が時期決定の最大の根拠である。朝顔形精製深鉢で、上下を画された文様帯に挿入される三角形構図は末端が接合せず、乱れやゆがみも多い。堀ノ内２式でも後半の様相だろう。炉内出土の J38-2 はミニチュア土器に近い小形の無文深鉢で、精度は低い。底部形態などは上ノ段式無文粗製深鉢に近く、評価が難しい。細片 J38-3 は堀ノ内 1 式の可能性もある。床面出土土器 (J38-4 ～ J38-12) の大半も J38-1 と整合的で、大きな破片も含まれる。J38-12 のみは加曽利 B1 式だが、細片なので混入としてもよいだろう。床面以外の土器も半分以上は堀ノ内２式やそれと整合的な破片である。中期～称名寺式期の J38-41 ～ J38-44 や堀ノ内 1 式 J38-45 ～ J38-47 は混入品としてよいだろう。J38-48 以下は加曽利 B1 式以降に属し、J38-55 晩期中葉まで下がるかもしれない。

時期別個体数・重量表を見れば、38 号住居では堀ノ内式が圧倒的に優勢だが、加曽利 B 式以降も若干存在する。検出状況から見て、38 号住居は床面近くまで攪乱を受けており、ある程度の挟雑物の混在は避けられないのだろう。38 号住居は堀ノ内２式後半に属すると判断する。中空土偶の中空脚部が 1 点あり、この住居に帰属する可能性が高い。重複するグリッドでも堀ノ内式が最多だが、より新しい土器も少なくない。それらの中から堀ノ内式を摘出して参考に図示した。

39 号住居



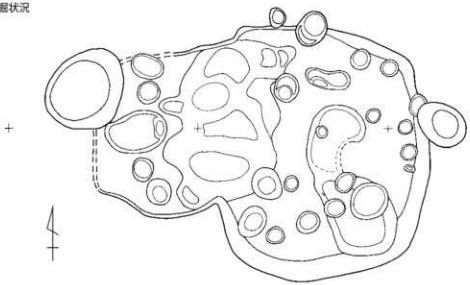
39 号住遺物出土状況



0 2m
1 : 60

図 165　39 号住居実測図 (1)

39 号住完掘状況



0　　2m
1：60

39 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期						晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
39 住			1	4	2	2			40	23	3		12	12		137	5	87
	34720		30	180	70	40			3890	530	30		260	180		2590	60	3560
S15W15						1			10	6		1	4	18	2	92	5	29
(39 住)	14535					30			170	60		20	80	330	30	1550	40	1010
S15W18			1			1			20	25	10	3	17	6		133	13	52
(39 住)	23590		30			20			210	1450	140	50	140	80		2030	140	1240
S15W21				2			1	1	20	64	31	19	22	28	3	290	21	105
(31・39 住)	45845			60			10	50	140	1300	520	370	320	280	50	3670	150	2900
S18W15						1	1		11	5	3	2	1	5		20	2	12
(39 住)	6655					20	20		170	100	40	20	10	50		330	10	200
S18W18							2		18	24	4	2		16	1	91	1	61
(39 住)	19810						330		290	420	70	40		200	10	1800	10	2180
S18W21				3					32	33	4	10	3	6		104	7	73
(39 住)	24610			60					350	540	50	160	50	110		1940	70	2660

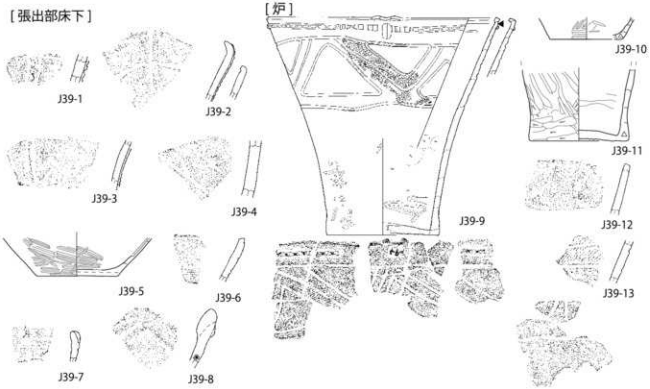


図 166　39 号住居実測図（2）、出土土器実測図・拓影（1）

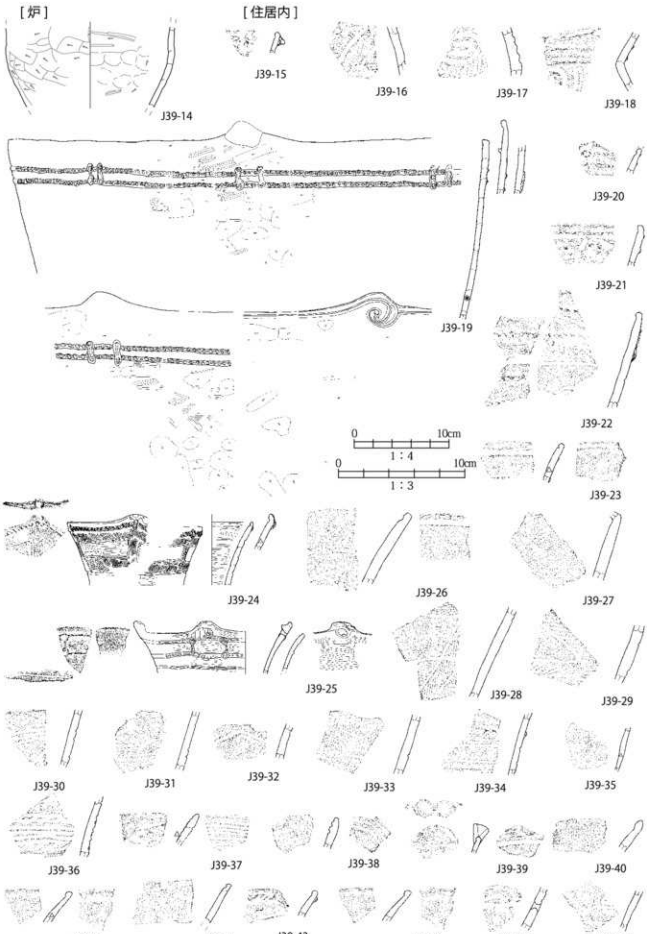


図 167　39 号住居出土土器実測図・拓影（2）

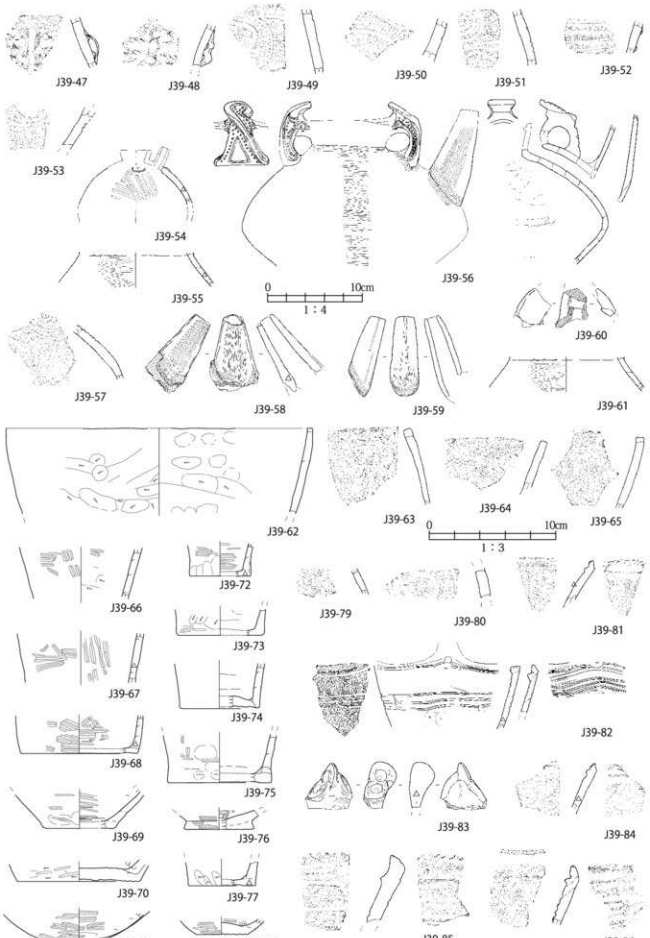


図 168　39 号住居出土土器実測図・拓影（3）

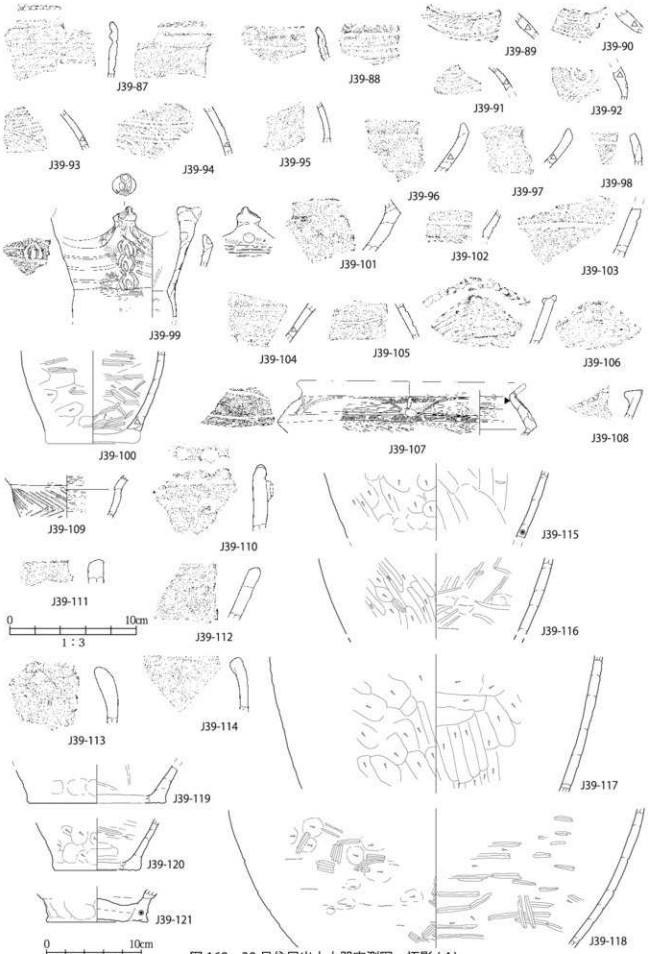


図 169　39 号住居出土土器実測図・拓影（4）

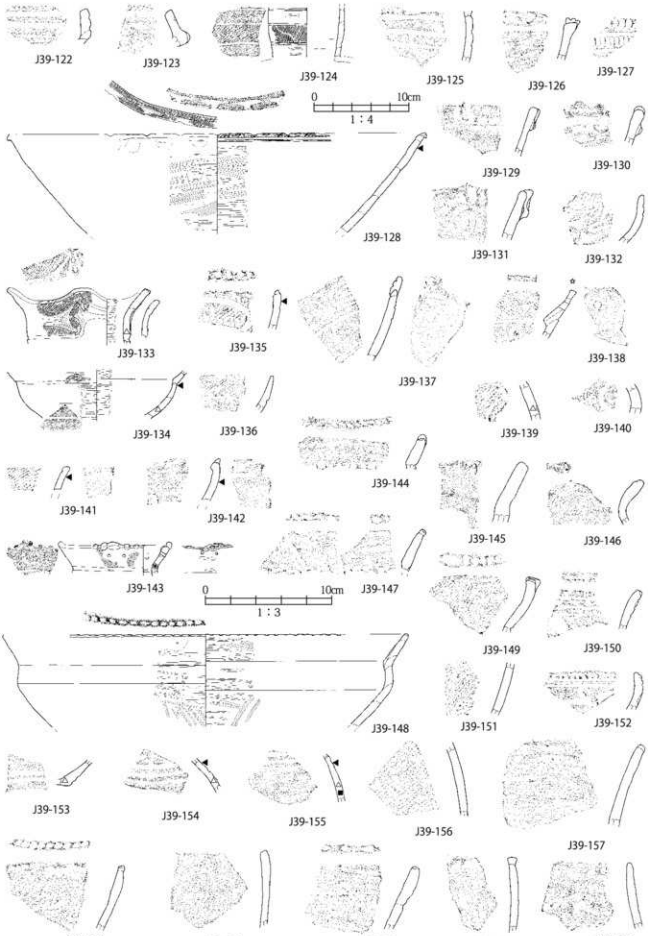


図 170　39 号住居出土土器実測図・拓影（5）

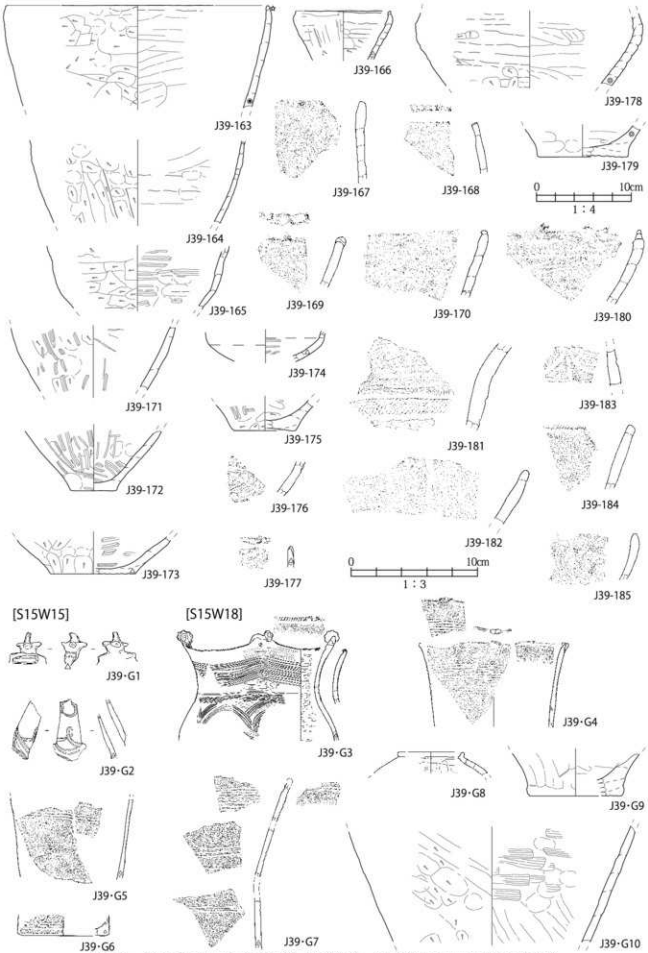


図 171　39 号住居出土土器実測図・拓影（6）、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図（1）

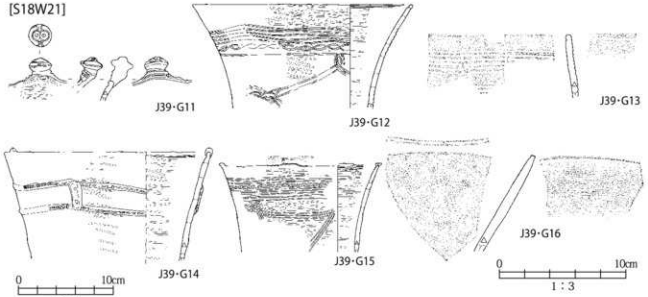


図 172　39 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（2）

(31)　39 号住居　［図 165 ～ 172、写真図版 30、31、48］【堀ノ内 2 式前半】

S15W15 ～ S18W21 の 6 グリッドにかけて位置する。第Ⅳ層上面で埋甕 7 を検出、続いて 39 号住居主体部の掘り方、出入り口施設（張出部）の石敷きと掘り方、土坑やピットも検出した。当初、主体部と張出部は別遺構と考えたが、主体部が敷石住居の構造を持つことが判明して、両者を一体の住居と理解した。また、精査の結果、切り合う遺構の埋甕 7、土坑 356、土坑 502、ピット 72、ピット 131 全てに切られることを平面で確認した。39 号住居は東西方向に主軸を取る柄鏡形敷石住居で、主体部東西 3.2m、南北 4.0m、各辺中央がやや張り出した方形の掘り方をもち、出入り口施設の張出部は東西 2.0m、南北 2.6m の方形を呈する。埋土はほとんど残らず、埋没状況は不明だ。主体部、張出部とも、残存する掘り方の深さは 10cm 程度しかない。主体部では床面らしい硬化面も、敷石の痕跡も確認できなかった。敷石があれば早々に剥がれて転用された可能性があり、その有無に関わらず、床面と掘り方底面の間の層が残存したに過ぎないのだろう。主体部ほぼ中央に石囲炉が構築される。東西 40cm、南北 90cm ほどの範囲で 10cm ほどの浅い掘り方を設け、その縁辺に人頭大～長辺 50cm ほどの円礫を配して縁石とし、窪みの一角に土器 (J39-9) の底部を置いている。縁石は 6 個が飛び飛びに残り、ほとんどが被熱で風化が進んでいた。炉は半壊状態なのだろう。土器は深く埋置したのではなく、埋甕炉とは言い難い。掘り方の底は被熱で若干赤化していた。壁際には径 20cm ほどの小ピットが点々と残され、40cm ほどの深さを持つものが含まれる。出入り口施設の張出部は、浅い掘り方の中央に、長軸 50cm ほどの円礫を 5 個、東西方向に並べ、その両側に同大からやや小ぶりな円礫を上面をそろえて敷き詰めている。出入り口部と主体部の接点には、東西 160cm、南北 200cm、掘り方底面からの深さ 120cm の大規模なピットが掘られ、それを埋めた上に出入り口施設の礫が並べられる。この大形ピットより西側、出入り口施設の西端にも浅いピットが 5 基残される。遺物は炉内出土、張出部下出土、住居内出土に別けて取上げられたが、住居内出土土器は床面付近もしくは床下の掘り方埋土からの出土なのだろう。

炉内出土の J39-9 が時期決定の最大の根拠となる。堀ノ内式の朝顔形精製深鉢で、構図に乱れや手抜きが無いので、堀ノ内 2 式前半と推測する。炉内出土の J39-10 ～ J39-13 も同類だ。住居形態とも整合的だろう。J39-14 は隆帯文土器共伴の無文粗製土器で、この個体の細片 1 片だけが炉内出土である。住居張出部下から出土した小破片も中期 (J39-1) ～堀ノ内式 (J39-2 ～ J39-5) で整合的だが、加曽利 B2 式 2 片 (J39-

6、J39-7) と中ノ沢 B 類型 1 片 (J39-8) については説明が付かない。

住居内出土土器の個体数の半分、重量では大半は堀ノ内 2 式で、J39-19 ～ J39-57 が該当するだろう。注口土器注口部 J39-58 ～ J39-61 や、朝顔形精製深鉢底部の J39-66 ～ J39-78 も整合的だろう。無文粗製土器のうち J39-62 ～ J39-65 は器壁が薄く、口端部が平坦で外面はケズリでフラットに仕上げる。堀ノ内期に特徴的な粗製土器ではあるまいか。三十稲葉式 J39-79 や称名寺式 J39-80、堀之内 1 式 (J39-16 ～ J39-18) は混入品で良いとして、加曽利 B1 式 (J39-81 ～ J39-98)、加曽利 B2 式 (J39-99 ～ J39-110)、上ノ段式前後と共伴しそうな無文粗製土器 (J39-111 ～ J39-118) や深鉢底部 (J39-119 ～ J39-121)、上ノ段式 (J39-122 ～ J39-124) 、瘤付土器 (J39-127) や中ノ沢 K 式 (J39-125、J39-126)、晩期初頭～中葉諸型式 (J39-128 ～ J39-156) とそれに共伴しそうな無文粗製深鉢 (J39-157 ～ J39-170、J39-178 ～ J39-180) など、破片は小さいが少なからぬ新しい時期の土器が出土する。炉が半壊状態だったのなら、住居の検出レベルまで攪乱を受けて後代の包含層が乗ったと考えられ、それに伴う遺物が一緒に取り上げられたからなのだろう。関連グリッドの時期別個体数・重量表では加曽利 B 式が優勢で、晩期土器も一定量認められ、堀ノ内式は少ないのもそうした解釈と整合する。

39 号住居からは動物骨が 185g 出土しており、遺跡全体の動物骨の 9％に当たる。だが、堀ノ内 2 式に伴うとは断定できず、後代の包含層に帰属する可能性もある。

住居張出部下出土土器の問題は解決できないが、39 号住居は量的に圧倒する堀ノ内 2 式前半に属すると判断する。中実土偶の板状の胴部が 1 点あるが、この住居に帰属する可能性がある。39 号住居関連グリッド出土の堀ノ内 2 式に関連しそうな土器を、参考に図示した。

(32)　40 号住居　［図 173、174、写真図版 31、33］【佐野 1b 式～ 2a 式】

S39W12 ～ S42W18 の 6 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。22 号住居で記述したとおり、22 号住居内の調査に着手したところで新たな炉縁石を発見し、22 号住居の下に 40 号住居が存在するのを把握した。また、住居の北東～東辺の掘り方を検出し、同時に 22 号住居の外側に位置する土坑の一部に切られることも確認した。22 号住居の調査終了後、その床下を精査して 40 号住居全体を検出し、最終的に土坑 647、土坑 648、土坑 768 を切り、土坑 262、土坑 590、土坑 629、土坑 631 ～土坑 633 に切られることを確認した。南北で最大 3.9m、東西 4.5m の長円形を基調とした不整形の掘り方を持つ。壁の立ち上がりは最大でも 20cm しか残らない。北西辺の壁際には、狭い範囲だが浅い壁溝が巡る。床に硬化面は確認できない。住居の中央付近を 20cm ほど窪め、人頭大以上の円礫 5 個と小礫 3 個を並べた石囲炉が構築される。炉の南東辺の縁石は失われている。炉内に焼土はないが、縁石の一部は被熱で風化している。南辺壁際のピットのみ 50cm ほどの深さがあるが、それ以外のピットは浅い。住居南半のピット出土として取り上げられた土器と、40 号住居出土として取り上げられた土器がある。前者のピットは特定できないが、該当する可能性のあるピットは 3 基ある。埋土が薄いので、後者のほとんどは床面付近からの出土だろう。

帰属土器はわずかで破片も小さく、時期別個体数・重量表を見れば圧痕隆帯文深鉢 J40-12 の存在が突出して大きいが、中期後葉の住居ではない。範囲が重複する S42W15 グリッドは佐野 2 式が突出するが、それらは 40 号住居の上に乗る 22 号住居に帰属するだろう。ピット出土の J40-1 ～ J40-3 は佐野 1b 式～ 2a 式に関わりそうで、22 号住居・関連グリッド出土土器の前半とは近そうだ。無文粗製土器 4 片 (J40-6 ～ J40-9) は隆帯文土器と共伴するタイプで、壷形鉢 J40-11 とともに晩期前葉に属する可能性があり、ピット出土土器よりは古そうだ。それ以外は中期～後期の細片で、いずれも混入品として除外できるだろう。破片が小さくていささか弱体だが、佐野 1b 式～ 2a 式の住居の可能性を考えたい。晩期の中でも新しそうな耳飾が 1 点あるが、住居と整合するかどうかはまだ不明だ。

(33) 竪穴３ ［図 175 ～ 178、写真図版 32］【堀ノ内２式 ～ 加曽利 B1 式前半】

S18W24 ～ S21W27 の４グリッドにかけて位置する。礫群中～礫群下の配石 19 の精査中に、第Ⅳ層上面で掘り方を検出した。配石 19 が竪穴３の上に乗り、他には切り合う遺構は無い。南北 3.0m、東西 2.8m で、各辺中央がやや張り出した方形の掘り方を呈する。埋土は分層できず、床はすり鉢状で中央部が深い。床面らしい硬化面はなかった。壁の傾斜は緩く、壁高は 40cm あり、エリ穴遺跡では最も深い。炉はなく、ピットなどの施設も発見できなかった。当初は 30 号住居と命名したが、炉が存在せず規模もやや小さいことから、竪穴３に名称変更した。竪穴住居とは言い切れないが、住居の可能性もある遺構と考えておく。

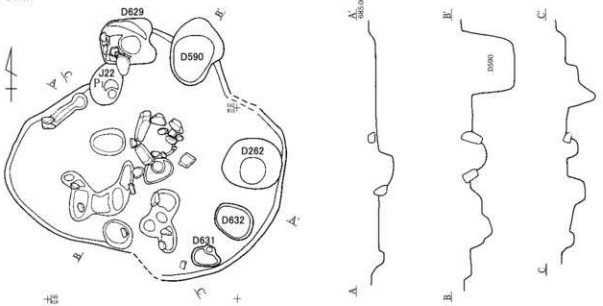
遺物は竪穴３として取り上げられており、床近くの出土品を摘出することはできない。帰属土器の７割は堀ノ内２式 (T3-9 ～ T3-38) ～加曽利 B1 式前半 (T3-60 ～ T3-75) に限定でき、時期別個体数・重量表でもこの２型式が圧倒的である。無文粗製深鉢 (T3-39 ～ T3-51) や朝顔形精製深鉢底部 (T3-52 ～ T3-59) も、その範疇に収まるだろう。称名寺式 (T3-2、T3-3) や堀ノ内１式 (T3-5、T3-6) は混入品として排除できる。加曽利 B1 式後半 (T3-76) 以降では、加曽利 B2 式 (T3-81 ～ T3-96)、東海地域後期中葉に関わる可能性がある浅鉢 (T3-97)、晩期初頭型式 (T3-102、T3-103)、佐野１式 (T3-104)、佐野２式 (T3-105)、氷式に先行しそうな浮線文土器 (T3-106) がある。無文粗製深鉢 (T3-99 ～ T3-101) は上ノ段式に組成するタイプだが、加曽利 B2 式に遡る可能性もある。これらを除外できる根拠は無く、特に埋土上に配石 19 が乗るので、縄文時代以降に撹乱を受けたことは考えにくい。配石 19 からは堀ノ内式から氷式までの土器が出土しており、帰属時期は氷式を下限とするのは確実だからだ。なお、竪穴３の範囲と重複する S18w24・S18W27 の２グリッドでは加曽利 B 式が優勢だが、B1 式前半に限定的というわけではない。少々強引だが、竪穴３は遺物量の多い堀ノ内２式 ～ 加曽利 B1 式前半の幅の中に属し、その廃絶後の窪地に、より新しい時期の土器が混入したと解釈しておこう。なお、中空土偶の中空脚部、中実土偶の上半身、エリ穴独自の分銅形土偶の下半が１点ずつ出土しているが、前２者は竪穴３に帰属する可能性があろう。

(34) 竪穴４ ［図 179 ～ 182、写真図版 32、48］【堀ノ内２式？、晩期？】

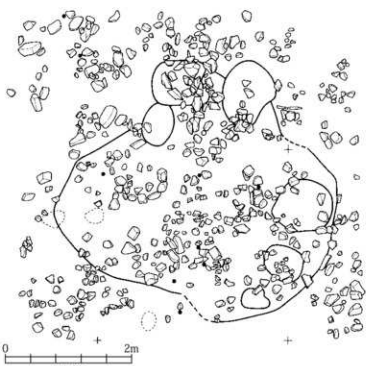
S27W21 ～ S30W24 の４グリッドにかけて位置する。礫群下の配石 21 の調査終了後、その下から竪穴４の掘り方を検出した。続いて 33 号住居を検出し、竪穴４が 33 号住居を切るのを平面で確認した。竪穴４の上に配石 21 が乗るのは確実である。竪穴４は南北 3.1m、東西 3.2m で、方形基調の不整形な掘り方を呈する。埋土は分層できず、床は西辺が低く、平坦ではない。床面らしい硬化面はなかった。壁はほぼ垂直で、壁高は 10cm 程度しか残っていない。炉はなく、壁際に寄った辺りに大小のピットが６基残される。深さはまちまちだが、柱穴の可能性もあるだろう。当初は 32 号住居と命名したが、炉が存在しないことから、竪穴４に名称変更した。

竪穴４の土器の半分以上はピット出土である。P1 は堀ノ内２式 (T4-7、T4-11 ～ T4-19、T4-25) が主体を占め、堀ノ内式の範疇に収まる破片 (T4-8 ～ T4-10) や、朝顔形精製深鉢底部 (T4-20 ～ T4-24) なども整合的である。しかし、加曽利 E 式 (T4-1 ～ T4-6) は混入品として排除できるにしても、加曽利 B1 式 (T4-26、T4-27)、晩期初頭型式 (T4-28 ～ T4-32)、佐野１～２式 (T4-33 ～ T4-41)、氷式 (T4-42) を排除できる根拠は見出せない。P2 出土土器は細片に過ぎず、中期土器 (T4-47 ～ T4-49) と女鳥羽川式 (T4-52) を含む晩期土器 (T4-50、T4-51) が混在して、時期決定の材料にはなりにくい。P3 は堀ノ内２式 (T4-58 ～ T4-62) が主体的だが、無文粗製土器 T4-64 は隆帯文土器と共伴しそうで、整合的ではない。P4 と P5 は細片ばかりで量も少なく、とりとめがない。P7 は唐草文系 (T4-80 ～ T4-83) が主体で、堀ノ内式細片 (T4-86、T4-87) はあるものの、中期後半の土坑の可能性があろう。竪穴４の埋土から取り上げられた土器は、堀ノ内２式 (T4-90 ～ T4-95、T4-123)、晩期初頭型式 (T4-102 ～ T4-110)、佐野式後半 (T4-111 ～ T4-121) に

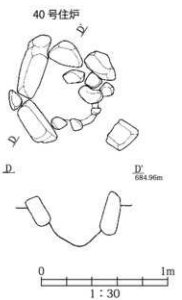
40 号住居



40 号住遺物出土状況



40 号住炉



40 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
40 住					1			1	2	4				1		7		6
	1055				270			20	30	70				20		110		70
S39W15				2	1			2	3	7	3	3	4	34	3	79	5	37
(22･40 住)	21370			80	30			30	20	90	20	100	30	1180	60	1460	40	1610
S42W12				1					1	4		2	5	10	5	46	7	37
(40 住)	11990			10					10	40		50	90	140	70	490	90	1320
S42W15										1			6	61	4	105	16	36
(22･40 住)	31985									10			60	1330	60	2470	240	3480

図 173　40 号住居実測図

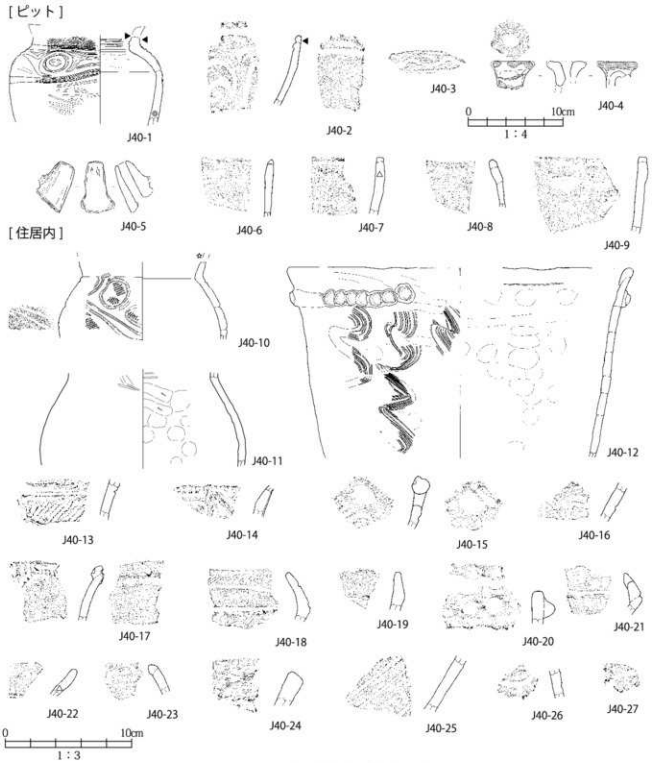
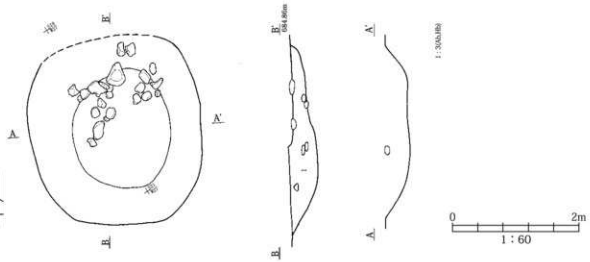


図 174　40 号住居出土土器実測図・拓影

竪穴3



竪穴3・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
竪3				4	1	1		2	42	46	3	2	2	1		85	2	58
	16070			110	100	10		70	850	910	120	40	20	10		1440	50	1690
S18W24						2		1	27	44	10	17	6	18	2	126	10	89
	36960					30		60	230	1080	530	510	190	300	30	2020	60	2830
S18W27				1			1	1	12	42	27	7	4	9	2	72	5	38
	25870			10			180	60	150	1490	820	320	40	180	20	1670	50	1000
S21W24									1	1						2	1	
	320								10	30						10	10	
S21W27		1					1		5	15	5	1		1	1	29	1	23
	6690	120					40		20	580	110	30		10	10	340	40	790

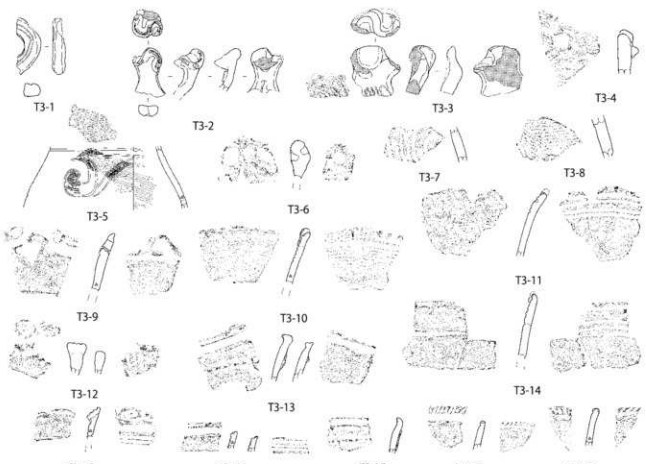


図175　竪穴3実測図、出土土器実測図・拓影（1）

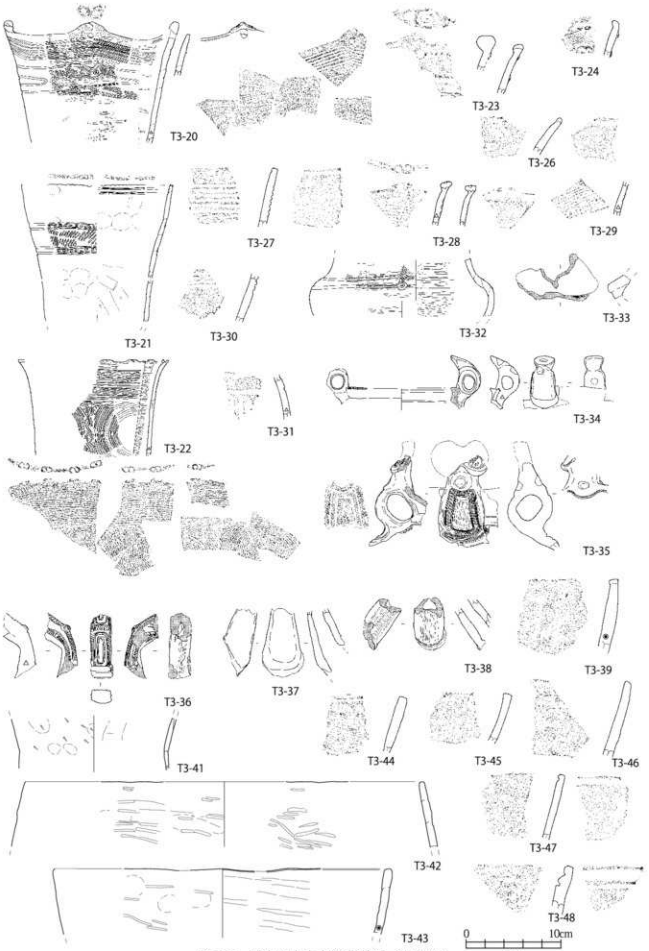


図 176　竪穴３出土土器実測図・拓影（2）

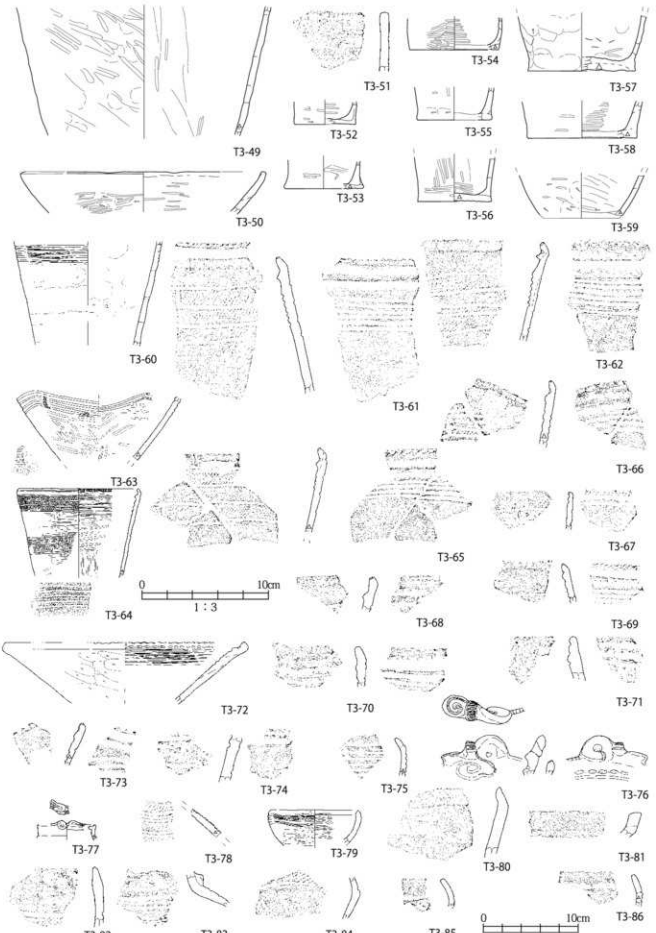


図 177　竪穴３出土土器実測図・拓影（３）

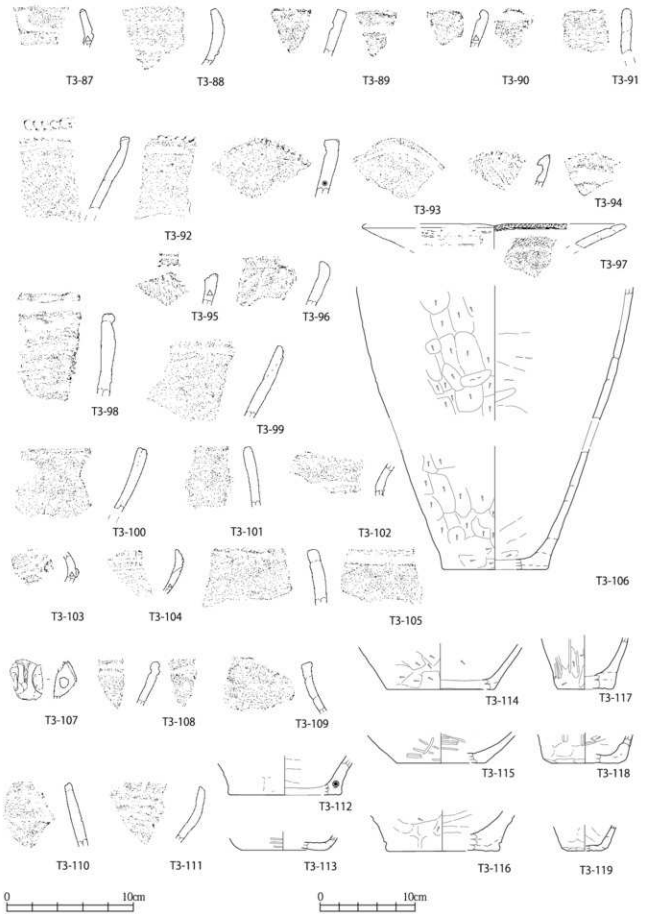


図 178　竪穴 3 出土土器実測図・拓影 (4)

３分される。いずれも破片は小さく、決定的な材料にはなりにくい。重複するグリッド出土の目立つ土器(T4･G1 ～ T4･G6) は、晩期前葉が主体である。なお、中実板状の土偶胴部が１点あり、堀ノ内２式と関わるだろう。なお、蓋形土器 T4-123 の縮尺は 1:2 である。

竪穴４の帰属時期は決め手を欠く。時期別個体数・重量表では堀ノ内式が最多で、範囲がほぼ重複する S30W24 グリッドも同様である。中期後葉の包含層に堀ノ内２式期の遺構が構築され、晩期に至ってその上部を損壊するような行為が行なわれて、その折に晩期の遺物が混入したといった経過を憶測するのが第１案である。堀ノ内２式期だとすれば、竪穴４は小ぶりすぎて住居とは言いにくい。堀ノ内２式期の包含層中に晩期の遺構が構築されたとするのが第２案である。炉こそないものの、晩期ならば竪穴４は竪穴住居の可能性が出るだろう。だが晩期土器破片は小さく、時期幅もありすぎる。なお、竪穴４の上に乗る配石 21 は遺物がなく、包含層中の検出なので、縄文時代の遺構だとしか言えず、竪穴４の時期特定の役にはたたない。第１案がやや優位かと思うが、第２案も併記して結論とせざるを得ない。P7 だけは中期後半の別遺構の可能性があろう。

(35) 炉１ ［図 183、184、写真図版 33］【佐野式以降】

S0W15 グリッドに位置するがその北西端にあたり、谷状低地の中に位置する。後期後葉以降、この低地は廃棄場に利用されたが、S0W15 グリッドは晩期前葉の廃棄場になる。炉１の位置は晩期前葉を中心とする廃棄場の末端付近で、第Ⅳ層上面で石囲炉の縁石を検出した。径 40cm ほどの範囲に、長辺 20cm 程度の円礫を６個、ほぼ円形に置いてあり、掘り方は不明だ。炉の内部に被熱痕跡は無い。その他の施設の痕跡は無い。炉１は他住居の炉と特段の相違点は無いので、住居の施設と考えないわけにはゆかないだろう。N3W15、N3W18、S0W15、S0W18 の４グリッドが住居範囲の候補になる。竪穴住居だとすれば、壁は第Ⅲ層中にあるはずだ。

炉内出土土器で図示しうるのは小破片２点に過ぎない。R 1-1 は低波隆帯文深鉢で中ノ沢Ｂ類型第５段階、R 1-2 は隆帯文タイプの無文粗製深鉢だ。また耳飾も１点あり、R 1-1 よりは古いだろう。すべて晩期前葉に属し、廃棄場からの転落品の可能性を否定できない。

第Ⅲ層中から掘り込まれた竪穴住居だとすれば、廃棄場の包含層を切って構築されたはずである。その場合、S0W15・S0W18 グリッドの包含層は晩期前葉の土器が卓越するので、それより新しい時期、佐野式以降だということになる。住居範囲候補の４グリッドには上ノ段式～佐野２式の土器もある程度存在する。晩期前葉以前の土器は周辺の廃棄場からの転落品と言うことになるが、佐野式は炉１の住居に帰属する可能性が出る。晩期中葉には配石遺構が構築される等、谷状低地の利用・使用が進展することと関連付けられるかもしれない。しかし、佐野式の時期の廃棄場は下流側に隣接する S3W21 グリッドが中心で、そこからの転落品が４グリッドに混入した可能性も高い。４グリッド出土土器は廃棄場出土土器の中で報告する。

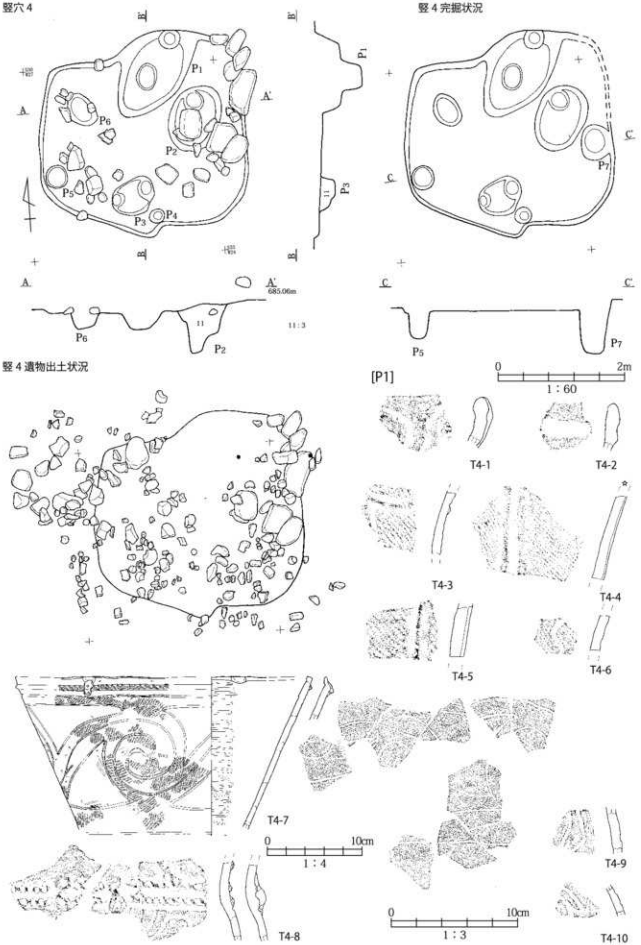


図179　竪穴4実測図、出土土器実測図・拓影(1)

竪穴４・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期						晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K		前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
竪４			1	1	3		1		18	6				5	10	1	54	5	21
	11075		10	240	60		10		410	70				130	180	90	2020	30	940
S27W21				2					46	23	9	10		10	30	5	114	8	91
	30800			20					830	520	150	320		90	760	100	2560	140	3730
S27W24			1	3			1		47	36	8	4		6	11	1	129	3	72
	32200		30	90			20		520	660	160	110		150	240	100	2220	20	2580
S30w21				2			4		3	2	8			1	5	1	15	2	9
	7125			100			210		300	10	220			50	610	20	210	10	910
S30W24				2					30	10	2	7		4	18	3	119		64
	27755			50					390	340	10	130		80	280	40	1850		3030

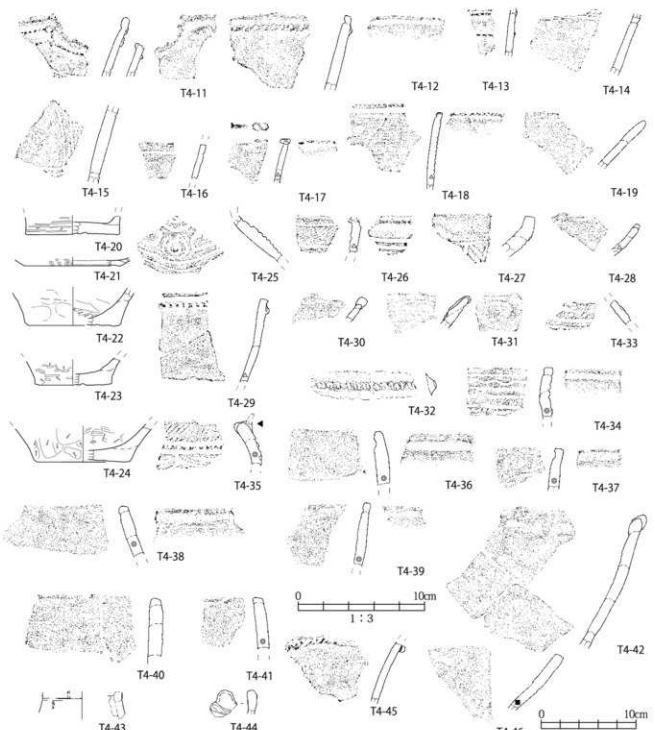


図 180　竪穴４出土土器実測図・拓影（2）

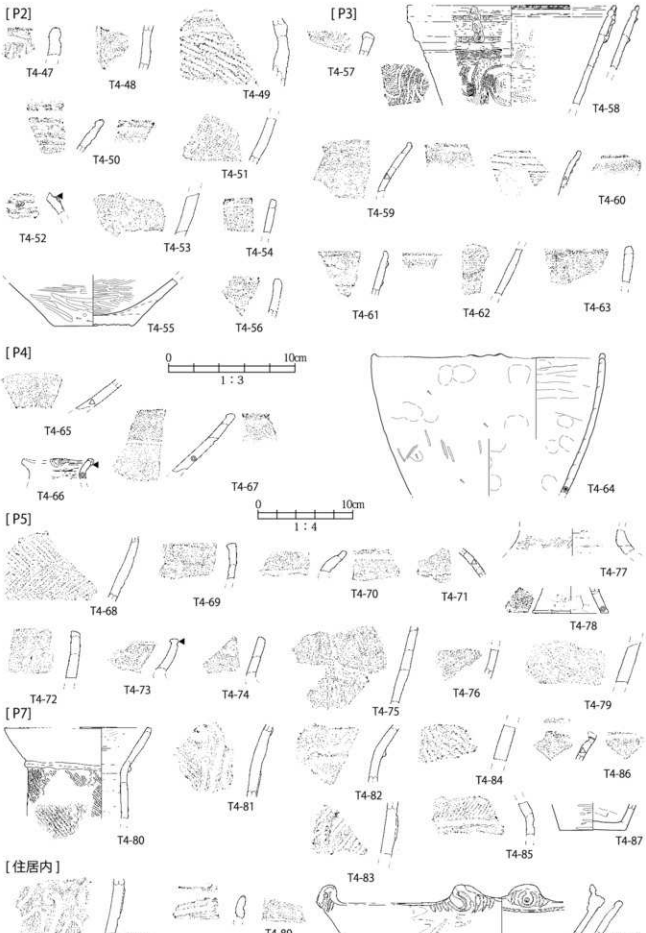


図 181　竪穴 4 出土土器実測図・拓影 (3)

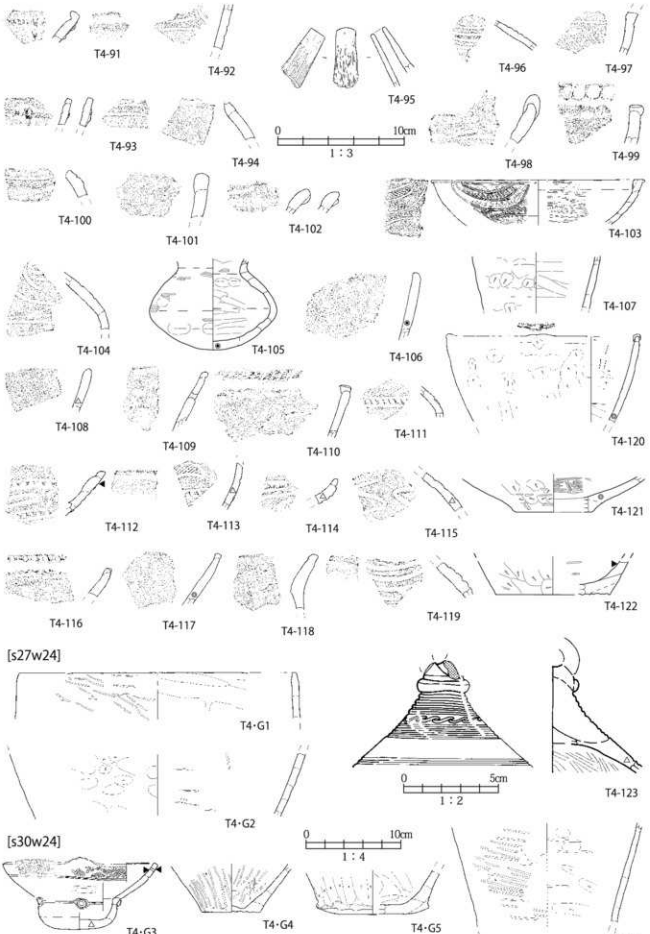


図 182　竪穴 4 出土土器実測図・拓影 (4)、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図

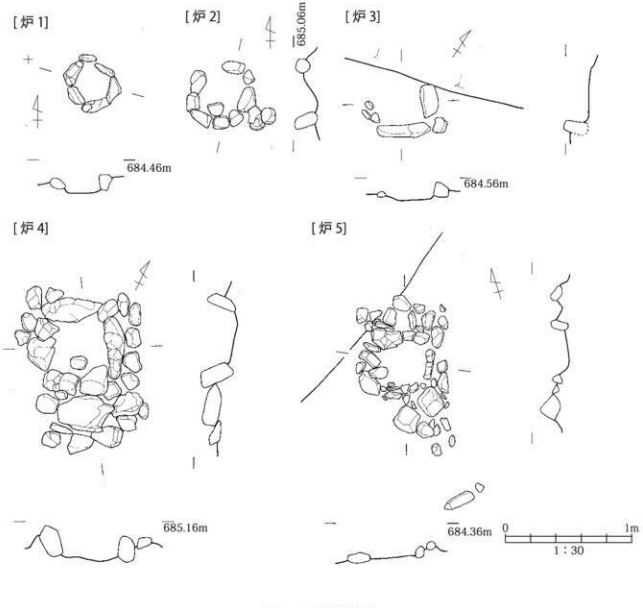


図 183　炉実測図

(36)　炉 2　［図 183、184、写真図版 33、48］【佐野 2 式】

S0W9 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で炉 2 の石囲炉縁石を検出し、続いて施設の礫の列を端緒に 36 号住居を検出した。炉 2 は住居に伴う施設だと思われるが、その住居の掘り方やその他の施設は検出できなかった。炉 2 は 36 号住居西辺と推定される位置に接しており、住居は切り合うはずだが、平面では何も把握できなかった。しかし、出土土器に明瞭な相違があったので、36 号住居埋土上に炉 2 の住居が構築されたと判断した。炉 2 の住居の北辺は谷状低地に近接する可能性がある。付近の廃棄場は炉 2 より古い時期の土器が主体を占めるので、住居と谷状低地が重複するなら、住居北辺は谷状低地に形成された廃棄場の上に乗ることになる。住居の床面らしい硬化面は認められず、ピットなどの施設も不明で、炉だけを把握するに留まった。炉は径 50cm の範囲に人頭大よりやや小ぶりの円礫を 8 個、ほぼ円形に並べた石囲炉で、北西辺の縁石 1 個を喪失している。縁石の一部は被熱で風化しており、炉中央はわずかに窪み、被熱で赤化していた。炉南東側の縁石に隣接して土器が出土した。完形に近い R2-1、大形破片 R2-2、小破片 R2-3 ～ R2-9 がそれで、炉の時期決定の有力な根拠となる。

R2-1 は佐野 2 式の無文粗製深鉢、R2-2 も同時期の肩部文様帯型深鉢、R2-3 と R2-4 は佐野 2 式の小破片、

炉１～炉５・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
炉１													1					
	70												10					
N3W15			1						1	8	6	21	46	26	4	127	5	58
	27505		60						10	90	80	400	1160	560	110	1800	30	2860
N3W18		1				1			2	8	7	7	26	42	5	158	15	67
	29685	20				30			50	80	50	90	330	1460	90	1830	90	2230
0W15			2	3			2	1	11	42	54	94	256	77	6	542	29	252
	33510		100	40			90	30	160	540	1370	2510	10090	1570	180	10280	230	12750
0W18			1	4					7	19	35	42	215	119	9	697	54	262
	59680		80	50					130	260	740	1060	6230	2710	140	14860	490	15320
炉２													1	3		1		4
	1145												10	1800		20		830
0W6				9	6			1	27	19	35	19	4	9	1	109	9	45
(36住・炉2)	34870			250	130			20	530	180	510	310	50	110	10	2130	200	1520
0W9				3	6			5	27	26	46	42	52	8		231	25	164
(36住・炉2)	54720			50	150			150	620	340	920	870	940	120		5710	330	4730
S3W6		2	1	15	4			6	28	9	18	12	10	7	5	140	24	81
(36住・炉2)	36460	50	10	540	120			150	470	110	370	180	230	180	140	1840	190	2350
S3W9		2	2	23	6			4	36	15	11	20	28	22		131	23	108
(36住・炉2)	39050	10	50	1030	210			110	490	170	160	350	570	310		2150	260	4280
炉３																		
	130																	
S3W24				1					5	13	10	5	57	74	88	434	19	207
	118315			40					120	280	150	90	1130	2570	3010	13420	170	18480
S6W24		1	1	6	1	2			10	57	28	27	79	66	31	593	25	194
	106440	10	100	130	10	20			50	880	750	680	1490	2370	1590	10180	200	9730
炉４					1											1		1
	440				40											10		80
S3W12		3	2	14	3	5	2	18	50	22	22	8	17	2	1	73	10	81
	33435	80	40	300	60	90	60	800	1240	560	480	200	280	40	10	1290	80	2860
S3W15		1	1	6	2	1		3	10	28	43	46	114	10		253	11	119
	55370	80	20	150	60	10		150	250	680	1080	990	4120	290		4450	190	5470
S6W12				8	1			4	9	12	13	4	13	2		75	11	49
	20475			140	20			60	60	200	130	160	160	20		760	80	1590
S6W15				2				3	18	5	8	8	11	7		69	5	59
	14935			20				130	460	60	60	110	140	80		620	40	1630
炉５																		
	0																	
S6W33		1	1	6		1	5			6	8	3	6	7		32	3	31
	10505	60	70	230		30	190			80	120	40	110	100		520	40	1120
S6W36			1						3	2	1	4	13	23	3	85	4	58
	25275		30						10	30	10	70	160	2170	80	3840	20	5890
S9W33		1	1	6		1	5			6	8	3	6	7		32	3	31
	13810	60	70	230		30	190			80	120	40	110	100		520	40	1120
S9W36		2				1	3		8	10	6	8	54	23	2	179	5	75
	44445	330				20	170		80	230	60	170	1330	590	160	4440	40	4820

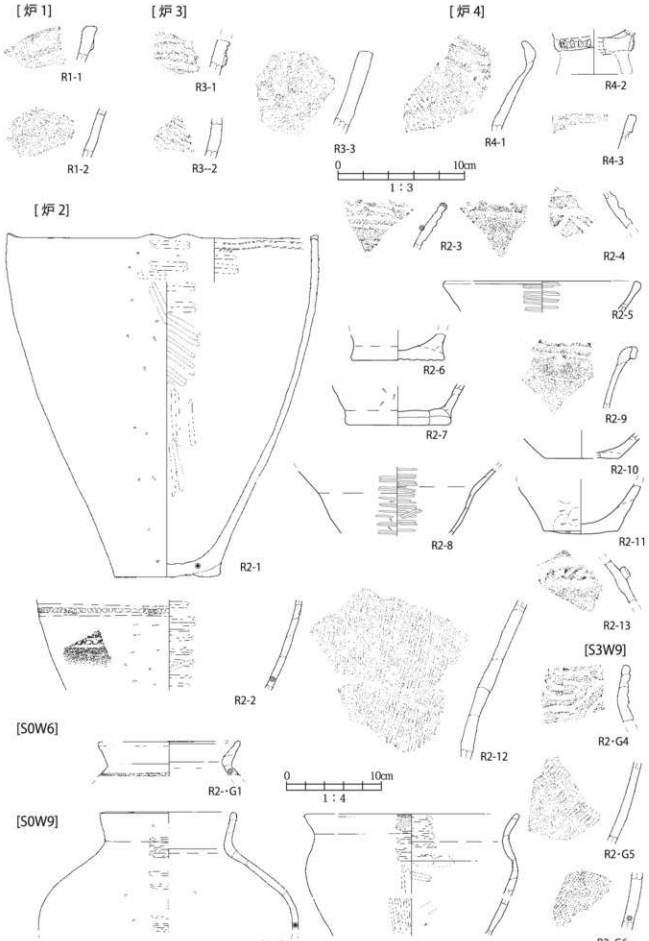


図 184　炉出土土器実測図・拓影

R2-5 は口縁部が外屈する深鉢で、これらを根拠に炉２の住居は佐野２式期に属すると判断する。それ以外は後期中葉～晩期前葉の混入品だが、浮線文土器 (R2-11 ～ R2-13) もあるのは少々問題だ。炉２の住居範囲に入る可能性のあるグリッド出土の晩期中葉の土器を、参考までに図示した。

(37)　炉３　[図 183、184、写真図版 34]　【堀ノ内１式あるいは上ノ段４式以降】

S6W24 グリッドに位置し、谷状低地に隣接する。第Ⅲ層の礫群中で炉３の縁石を検出、ほぼ同時に 17 号住居、18 号住居、土坑 209 も検出し、また、谷状低地の縁辺も把握した。精査の結果、炉自体はいずれの遺構とも切り合わず､谷状低地とだけ重複することが判明した。決定的な根拠は無いようだが､炉３は「谷状低地より新」との調査所見があり、炉３が谷状低地の上に構築された可能性が高いと判断される。周囲には炉３と関連しそうな施設は発見できなかった。径 40cm ほどの範囲を若干窪め、その縁辺に長辺 40cm 程度の円礫を配置し、縁石とした石囲炉で、北辺～西辺の縁石は喪失している。被熱で風化した縁石はいずれも長く、各辺１個で構成できたのかもしれない。炉中央は被熱で赤化していた。炉３は住居の炉と特段の相違点は無いので、炉１と同様に住居の施設だと思われる。S6W24、S3W24 の２グリッドが住居範囲の候補になる。

炉３に伴う遺物はわずかで、いずれも中期中葉に属するが、破片が小さすぎて混入の可能性を排除できず、土器からは帰属時期は決められない。

炉３の住居は周囲の遺構とも切り合ったはずである。いずれにも切られるならば堀ノ内１式以前の住居、２基の住居埋土上に構築されたなら上ノ段４式以降の住居、このどちらかではないかと推測する。中期の住居はⅣ層中で掘り方が検出できるので、炉３が中期に遡ることは無いだろう。古く考えるなら堀ノ内１式期の可能性が出る。一方、S6W24、S3W24 出土土器の時期別個体数・重量表を見ると、浮線文期が最も多い。最も新しく、量も多いのなら浮線文期は有力な候補になるが、別の問題が生じる。それは廃棄場が時間と共に谷状低地の下流側に移動していることで、佐野式期の廃棄場の中心はすぐ隣の S3W2 1 グリッドだった。S6W24、S3W24 の浮線文期土器は廃棄場に由来する可能性も高いのだ。炉３の住居は堀ノ内１式、上ノ段４式～晩期のいずれかの可能性がある、とまでしか言えそうも無い。

(38)　炉４　[図 183、184、写真図版 34]　【後期前葉～後葉】

S3W12 ～ S6W15 の４グリッドの境界に位置する。第Ⅲ層中で石囲炉の縁石を検出し、周囲を精査したが住居の掘り方は検出できず、関連しそうな施設も発見できなかった。炉４は径 40cm 程の範囲を若干窪め、その縁辺に円礫を方形に配置して縁石とする。すべて被熱で風化した縁石の最大は１辺 50cm ほどで、立て並べた状態である。東辺と南辺の縁石の外側には、控えの礫が配置されるが、南辺の礫は大きい。多重の石囲炉というよりは、炉の周囲に石敷きが為されたように見える。こうした構造は敷石住居やその系譜を受け継ぐ後期中葉～後葉の住居に見られる。炉内には焼土が残されていた。炉４から取り上げられた遺物はわずかで、図示しうるのは３点に過ぎない。R 4- 1 は加曽利 E 式末期、R 4- 2 の高台付底部は後期後葉～晩期前葉か。R 4-3 は後期以降の無文粗製土器だ。まとまりが無く破片も小さいので、時期決定の根拠にはならない。炉の形態から後期前葉～後葉の住居の一部の可能性があると考える。S3W12 ～ S6W15 の４グリッドが住居の範囲の候補になる。炉４を中心とした直径 4m ほどの範囲は、土坑やピットが皆無に近く、小規模遺構の空白域となっており、炉４の住居の存在と関連のある現象かもしれない。後代に敷石を剥ぎ取られた敷石住居の跡、というのは憶測が過ぎようか。

周辺グリッドのうち廃棄場を含む S3W15 グリッドを除外して出土土器の時期別個体数・重量表を見ると、堀ノ内式をピークに、称名寺式～加曽利 B 式が多く、晩期土器はわずかしかない。先記した憶測とは整合

的ではある。

(39) 炉 5 ［図 183、写真図版 34］【後期前葉～後葉】

S9W36 に位置する。第Ⅲ層の中位～下位で炉の縁石を検出、ほぼ同時に炉 5 を取り囲む 16 号住居の掘り方と、谷状低地の縁辺を平面的に検出した。炉 5 が 16 号住居埋土中に構築されるのは明白で、谷状低地の埋土の上に炉 5 の縁石の一部が乗ることも確認できた。炉 5 は両者よりも新しい時期に帰属する。炉 5 は径 40cm 程の範囲を若干窪め、その縁辺に人頭大～拳大の円礫を方形に配置して縁石とする。北辺と南辺の縁石の外側には、控えの礫が配置されるが、南辺の礫はやや大きい。多重の石囲炉というよりは、炉の周囲に石敷きが為されたように見える。縁石の半分は被熱で風化し、炉内には焼土が残される。出土土器は無いので帰属時期を決められないが、炉 5 が 16 号住居の上に乗ることから、中期中葉Ⅱ期より新しいことは確実である。

炉 5 は炉 4 と似た造り方なので、敷石住居の系譜を受け継ぐ後期前葉～後葉の住居の一部の可能性があると考える。住居の範囲は S6W33、S6W36、S9W33、S9W36 の 4 グリッドが候補である。その中で目立つのは S6W36 と S9W36 の佐野 1 式～ 2 式だが、この 2 グリッドは谷状低地斜面の廃棄場を含んでおり、佐野式は廃棄場に帰属する土器だと判断する。それ以外の土器は散漫で、時期決定の根拠にはなりにくい。

中期中葉Ⅱ期以前の 16 号住居の上に乗る位置に、後期前葉～後葉に炉 5 の住居が構築された。いずれの住居もその北辺は谷状低地の斜面にかかり、あるいは斜面の一部を埋めて構築された。住居廃絶後、降雨などにより住居北辺は流失し、自然の斜面に帰った。そこに晩期中葉の廃棄場が形成された。以上が推測できるシナリオである。

2 埋甕

(1) 埋甕 1 ［図 185、写真図版 35、49］【堀ノ内 1 式後半】

S36W42 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で 11 号住居を検出、同時にその埋土中に埋甕 1 の埋設土器を発見した。精査の結果、埋甕 1 が 11 号住居を切ることを確認した。2 個体の土器を埋設した埋甕である。住居の埋土中ということもあって掘り方は明瞭には把握できなかったが、埋設土器のサイズから見て、径 50cm 以上の掘り方を設けたはずだ。その中に深鉢 U1-1 の下半を、やや傾けながらほぼ正位に置き、その中央の 10 ～ 15cm ほど上位に、深鉢 U1-2 の底部を正位に置いている。U1-1 を埋置して少々土を入れた中に、U1-2 を重ねて置いた状態といえるだろう。深鉢 U1-1 の上半は粘土帯の接合部分で欠損しているが、意図的に打ち欠かれたかどうかは不明だ。埋甕埋土には特別な所見はない。

埋 U1-1 は体部下半が丸く、上半が大きく開く鉢で、体部が主文様帯となる。太い沈線で渦を描き、その両側に三角構図を描き、それらのモチーフ内に縄文を充填する。U1-2 も同様の器形で、描かれる構図も似ているが、縄文ではなく沈線が充填される。2 点とも堀ノ内 1 式後半に位置付けられよう。

(2) 埋甕 2 ［図 185、写真図版 35、49］【晩期前葉】

S39W30 グリッドに位置する。周囲は遺構が疎らで、孤立した位置に当たる。第Ⅳ層上面で埋甕 2 の埋設土器 U2-1b を検出した。精査の結果、掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 60cm 以上の掘り方を設けたはずで、その中に U2-1b の体部下半が正位に埋置されていた。U2-1b の底部は欠損し、体部最大径辺りより上位も欠損する。同一個体と判断される口縁部破片 U2-1a が一緒に取り上げられているが、接合はしない。後述する埋甕 4 や埋甕 7 も同様な状況が観察された。埋置された略完形品 (底部毀損) が、後代の攪乱などで損壊した可能性と、埋置時に上半も故意に打ち欠き、その破片を一緒に埋納した可

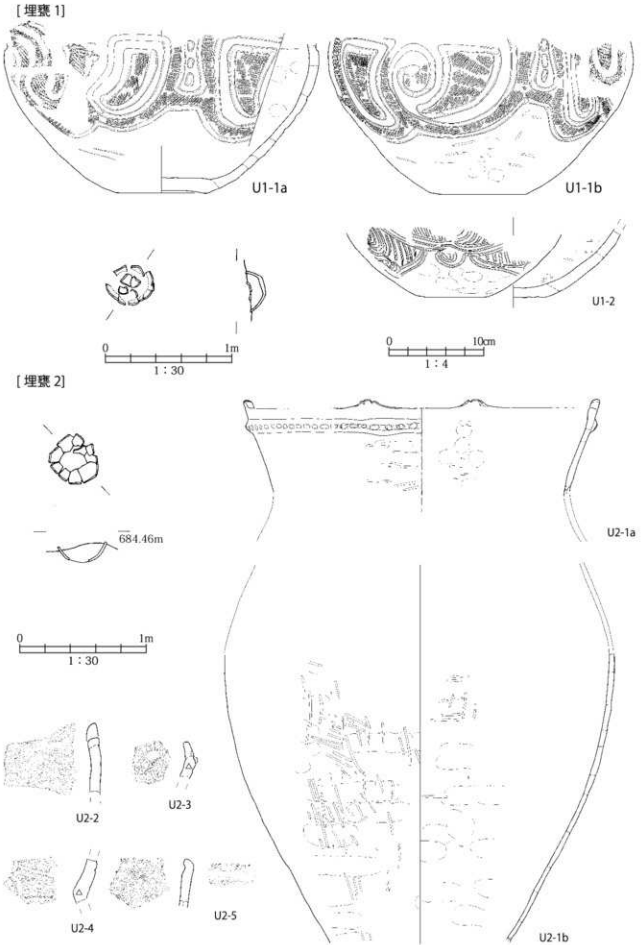


図 185　埋甕 1、埋甕 2 実測図

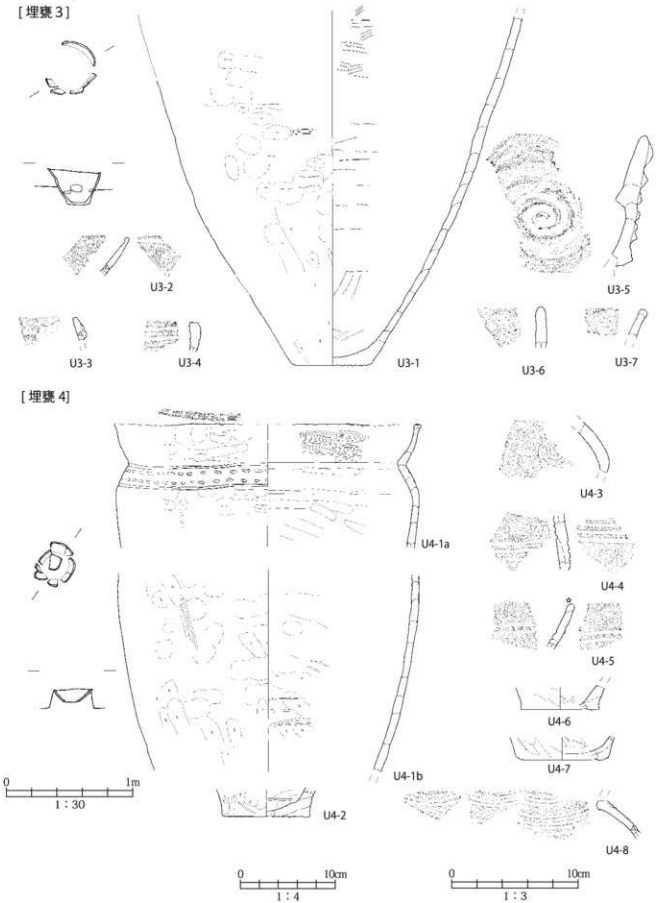


図 186　埋甕 3、埋甕 4 実測図

能性とが考えられるが、埋甕７の状況から見て、後者の可能性が高い。埋甕埋土には特別な所見はない。

U2-1a は平縁隆帯文深鉢で、隆帯上には爪跡付の横位指圧痕が残るので、中ノ沢Ｂ類型第５段階に相当する。口縁突起と１条隆帯が完全に分離しており、第５段階でも後半だと判断する。晩期初頭ではなく、前葉の可能性が高いだろう。体部下半 U2-1b は器壁が薄く、オサエ痕が残り、ケズリは部分的にしかないなど、隆帯文深鉢の標準的な製作技法を示す。同時に取上げられた小破片 U2-2 以下は、U2-1 とは時期的に合わないので、取り上げ時に混入したのだろう。

(3) 埋甕３ ［図 186、写真図版 35、50］【後期中葉】

S30W27 グリッドに位置する。第Ⅲ層の礫群中で検出した配石 23 の精査時に、第Ⅳ層上面で配石を取り囲む 33 号住居の掘り方と、33 号住居埋土中の埋甕３を検出した。埋甕３が 33 号住居を切るのは明白であった。掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 60cm 以上の掘り方を設けたと推測でき、その中に U3-1 が正位に埋置されていた。U3-1 は底部から体部上半、口縁部近くまで残存する。口縁部の欠失が意図的かどうかはわからない。底部周辺は被熱で変色し、風化が進んでいるので、日常的に使用された土器が埋甕に利用されたと判断する。埋甕埋土には特別な所見はない。

U3-1 は無文で器壁が厚く、下半部内面側は粘土帯の接合痕が顕著に残り、外面側は広汎にケズリがなされる。上半部内面側は工具を用いたナデ、外面側はオサエ痕が顕著で、ケズリも光沢もない。器厚と技法から、後期中葉の粗製土器ではないかと推測する。一緒に取上げられた小破片のうち、U3-3 は時期が近そうだが、いずれも取上げ時の混入だろう。

(4) 埋甕４ ［図 186、写真図版 35、50］【佐野 1b 式？】

S24W21 ～ S24W24 グリッドにかけて位置する。第Ⅳ層上面で埋甕４を検出した。切り合う遺構はなく、掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 50cm 以上の掘り方を設けたと推測でき、その中に U4-1b 体部が正位に埋置されていた。

U4-1 の体部下半以下は欠失し、体部最大径辺りより上位も欠失する。同一個体と判断される口縁部破片 U4-1a が一緒に取り上げられているが、接合はしない。こうした状況は埋甕２とそっくりで、埋置時に口縁部を故意に毀損させ、その破片を一緒に埋納した可能性が考えられる。埋甕埋土には特別な所見はない。

U4-1 は口縁部が屈曲して外反し、肩部が張る深鉢で、肩部に文様帯が設定されるので、肩部文様帯型深鉢と呼ぶのが良いだろう。口縁部・肩部はほぼ同径だが、肩部の径が時間と共に大きくなる傾向がありそうだ。口唇部には疎らに圧痕が加えられるが、突起が付された可能性もある。文様帯は上下を単純な沈線で画し、中央に２条の短線列を充填する。界線が単純な沈線であることと、単位文代用の点列が刺突や圧痕ではなく短線であることは、古相を示すと思われるので、佐野 1b 式ではないかと推測するが、佐野式の編年観には未確定部分が残るので、最終所見は第４分冊で示したい。一緒に取上げられた小破片のうち、U4-1、U4-3 は時期が近そうだが、いずれも取上げ時の混入だろう。

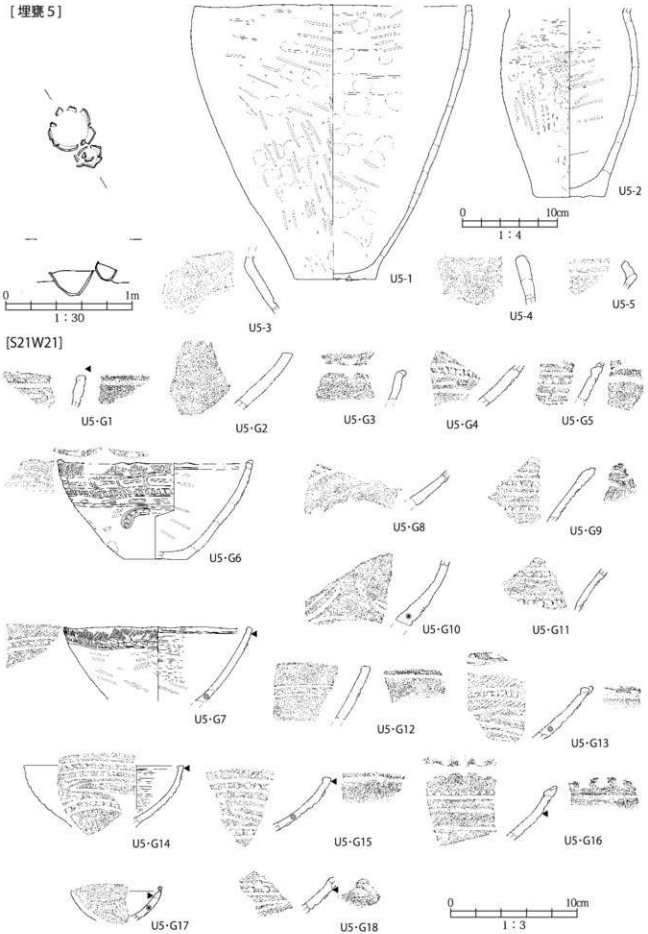


図 187　埋甕 5 実測図、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（1）

[S21W21]

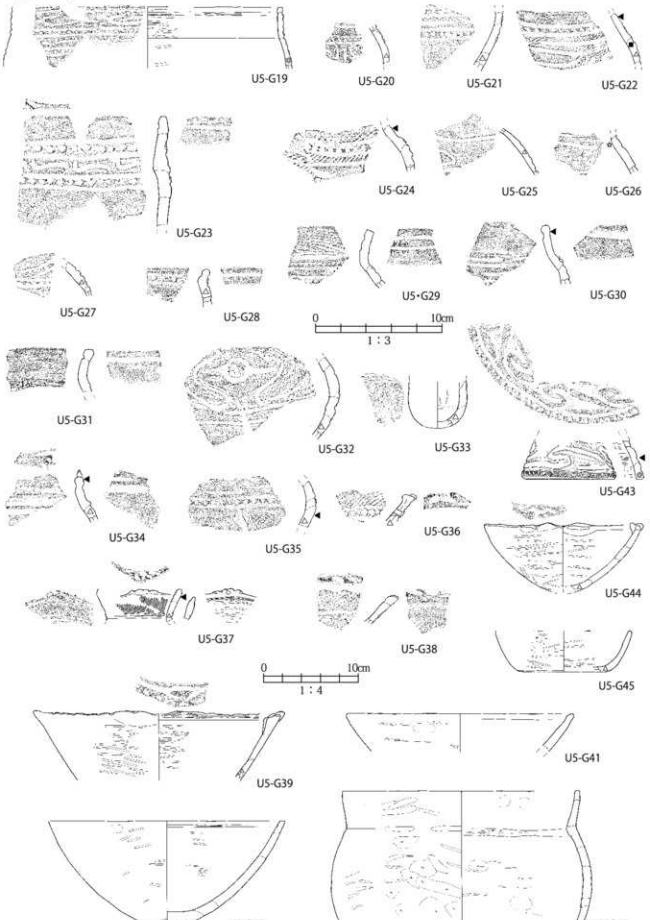


図 188　埋甕 5 関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（2）

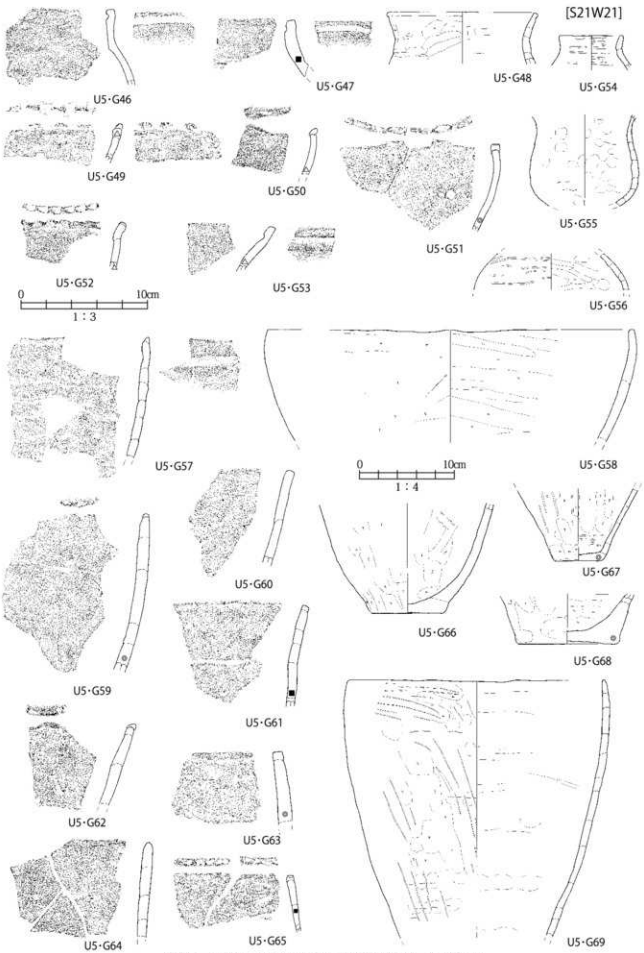


図 189　埋甕 5 関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（3）

(5) 埋甕 5 と S21W21 グリッド出土土器 ［図 187 ～ 190、写真図版 35、36、50］【佐野式】

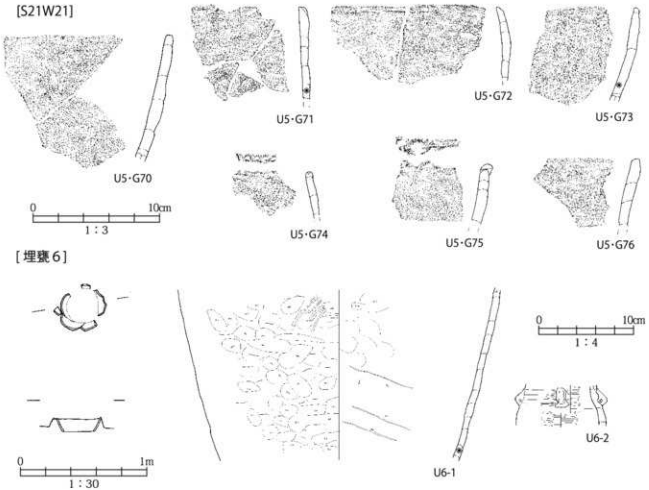
S21W21 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で埋甕 5 の 2 個体の埋設土器を検出、引き続いて埋甕 5 と切り合う土坑 403 も検出した。埋設土器が損壊していないので、埋甕 5 が土坑 403 を切るのは明白である。掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 60cm 以上の掘り方を設けたと推測する。その中にほぼ完形の U5-1 が正位に埋置され、その斜め上に密接するように、完形に近い U5-2 が若干傾きつつもほぼ正位に置かれていた。U5-1 は底部から口縁部まで揃っており、U5-2 は口縁部が欠損するものの、底部から体上半部まで揃っている。U5-1 の体部下半は被熱によって明色に変色しており、日常的に使用された土器が埋甕に利用されたと判断する。小形の U5-2 も体部下半内面側が変色しており、使用痕跡があると考える。埋甕埋土には特別な所見はない。2 個体の完形土器を、相互に接するように順次埋設した埋甕である。

U5-2 は器壁が薄めの深鉢で、口縁部が外反し、外反部以上が欠損する。緩い外反ならば平縁隆帯文深鉢の可能性、はっきりした屈曲なら佐野式の無文粗製深鉢の可能性がある。外面は全面ケズリのうえミガキを加えて光沢があり、器面は凹凸がない。内面も広汎にケズリ、部分的にミガキも加える。総じて精度の高い整形で、小形品だということも合わせれば、隆帯文土器よりは佐野式の可能性が高いだろう。ほぼ完形の U5-1 は単純な砲弾形の無文粗製深鉢で、口縁部だけが 1/3 程度欠損している。器壁は薄いほうだ。口唇部は平坦で、突起などの付加的装飾はないらしい。内面側にも沈線などの文様はない。外面は全面に浅いケズリを施すが、オサエ痕は消しきれない。内面にケズリはなく、オサエ後にナデで仕上げるが、器面の凹凸は著しくは無い。隆帯文系とも佐野式系とも言い切れないが、U5-2 と共伴するからには、佐野式の可能性が高いのではないか。なお、一緒に取上げられた小破片 U5-3 ～ U5-5 は後期土器ばかりで、取上げ時の混入だろう。

埋甕 5 の位置する S21W21 グリッド出土土器の時期別個体数・重量表を見ると、佐野式が圧倒的である。佐野式が集中するグリッドがあるのは 22 号住居周辺も同様で、発掘段階では 22 号住居の範囲を小さく見すぎていたのではないかと、判断を変更した。だが、S21W21 グリッドのみに佐野が集中するのは、住居のような規模の大きな遺構を把握しそこなったからでは無いと思われる。遺構としては小規模な埋甕 5 に関連して、遺物が集中した可能性を考えたい。そこで、S21W21 グリッド出土の晩期土器もここに掲載した。

S21W21 出土の晩期土器の一括性は保証されないものの、佐野 1 b 式～佐野 2 式にほぼ限定される。晩期前葉に遡るのは U5･G1、U5･G2 のみで、無文粗製深鉢のうち U5･G69 ～ U5･G76 にその可能性が残るが、これらは佐野式の範疇に入る可能性もある。浮線文期に下る土器は無い。有文土器は、屈曲を持たず単純に開く浅鉢や鉢と、体部上位が張り出して外屈する口縁部がつく鉢や深鉢に大別できる。後者は張り出す肩部に主要な文様帯が設定されるので、肩部文様帯深鉢 (或いは鉢) と呼称する。単純な浅鉢、肩部文様帯深鉢とも、文様帯の上下を画するのに、点列を挟んだ 2 条の沈線が多用される。「点列界線帯」と呼称したい。肩部文様帯深鉢は佐野 1b 式で明確化して佐野 2a 式から主体的となり、点列界線帯は佐野 1a 式で萌芽し佐野 2a 式から多用される、という中村豊の見解 [中村 1997] に従えば、こうした要素が集中的に見られる S21W21 出土土器は、佐野 2a 式が主体を占める可能性が高い。それらには主文様帯の鍵ノ手文やそれから派生するクランク構図と、雲形文を祖形としそうな硬直化した弧線モチーフが多用される。U5･G19 の口縁部には安行 3c ～ 3d 式の要素が導入される点には注意しておきたい。U5･G29 ～ U5･G31 、U5･G46 ～ U5･G48 などは佐野 2b 式粗大工字文と関わるか、それに後続する可能性もあろう。

佐野式の埋甕 5 と、佐野 2a 式を主体としそうな S21W21 出土土器との同時性は確定できないが、時期的に重なる可能性があることは否定できない。埋甕 5 に伴う祭祀の場か、祭祀後の廃棄場などの可能性が浮かぶように思われる。さらに、S21W21 の両隣の S18W21・S24W21 には、甕 5 と近接する時期の可能性がある埋甕 4 と埋甕 6 があり、この近辺は埋甕が集中する特別な意味のあるエリアの可能性が高い。



埋甕関連の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
埋甕1	1825																	2 1850
埋甕2	1515								1 10	1 10			1 240			1 30		1 10
埋甕3	3770			1 120					1 10	1 10	1 10					2 20		3 3160
埋甕4	1920									2 50				1 1680				3 70
埋甕5	3080									1 10	1 10					3 1950		6 2610
S21W21	30060			1 30					8 100	16 320	3 50	1 10	6 90	36 1570		113 3670	1 10	66 4010
S21W24	320								1 10	1 30						2 10	1 10	
埋甕6	870																	
埋甕7	5485												1 30	1 3150		4 1110		
埋甕8	1705															2 20		1 1950
埋甕9	1945														1 1700	2 50		
埋甕10	8910			1 9000 以上														
埋甕11	805			1 30					1 520									1 740

図 190　埋甕５関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（4）、埋甕６実測図

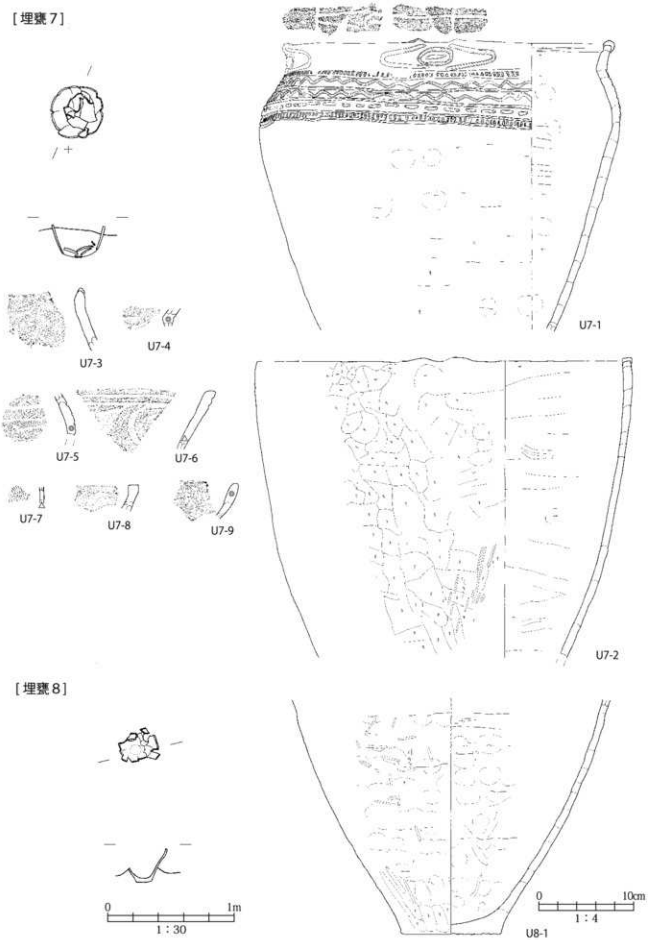


図 191　埋甕 7、埋甕 8 実測図

S21W21 出土土器と、このエリアの最終評価は、第 4 分冊で果たしたい。

(6) 埋甕 6 ［図 190、写真図版 36、51］【晩期前葉～中葉】

S18W21 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で埋甕 6 を検出した。切り合う遺構はなく、掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 50cm 以上の掘り方を設けたと推測でき、その中に U6-1 の体部が正位に埋置されていた。U6-1 の体部下半以下は欠失し、体部上半も欠失する。下半は意図的な欠損か欠損個体が選択されたのだろうが、上半の欠失理由は不明である。埋甕 6 出土として一括で取上げられた破片以外とは接合しなかった。U6-1 の下半は被熱によって明色に変色しており、日常的に使用された土器が埋甕に利用されたと判断する。埋甕埋土には特別な所見はない。

U6-1 は無文粗製深鉢の可能性が高い。器壁は薄く、内面・外面とも全面的に浅いケズリが施されるが、オサエ痕跡を消しきれず、器面に凹凸が残り、特に外面は顕著だ。佐野式よりも隆帯文系土器の技法に近いように見受ける。帰属時期を確定しきれないが、晩期前～中葉の間に位置付けることはできそうで、底部を欠いた土器を埋甕に使用するのは、同時期の埋甕との共通点だろう。U6-1 と一緒に取上げられた U6-2 は、あまり類例のない小形土器の破片で、U6-1 と整合するかどうかわからない。なお、時期別個体数・重量表には埋甕 6 の数値が記載されていないが、口縁部・底部が欠けているため、数値表示の対象とならなかったことによる。

(7) 埋甕 7 ［図 191、写真図版 36、51］【佐野 1b 式？】

S18W15 ～ S18W18 グリッドにかけて位置する。第Ⅳ層上面で埋甕 7 を検出、続いて 39 号住居主体部の掘り方と出入り口施設の石敷きを検出した。埋甕 7 は 39 号住居埋土中に構築され、埋設土器がほぼ完存するので、埋甕 7 が 39 号住居を切るのは明白である。掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 60cm 以上の掘り方を設けたと推測でき、その中に U7-1 の体部が正位に埋置されていた。U7-1 の体部下半以下は欠失するので、底部のない、或いは底部を打ち欠いた個体が選択されたのだろう。検出時には短く外反する口縁部も欠失していたが、U7-1 として取上げられた小破片と接合して口縁まで復元できた。口縁部は打ち欠かれたのではなく、発掘時に破損したと推測される。U7-1 の底近くには、U7-2 の破片が内面側を下にし、一部は U7-1 の内面に立てかけるようにして置かれていた。復元の結果大破片 2 片にまとまって、口縁部から体部下半まである同一個体の深鉢と判断されたが、直径の 1/3 ほどしか残っておらず、大破片が埋納されていたと考える。U7-2 の下半は被熱によって明色に変色しており、日常的に使用された土器が埋納されたと判断するが、U7-1 は全面的に風化が進み、被熱の有無は観察できない。埋甕埋土には特別な所見はない。

U7-1 は肩部文様帯深鉢で、口縁部は短く外屈し、最大径は肩部にあるが、大きく張り出すわけではない。口唇部は平坦で、加飾のない小突起が 4 単位付加され、その直下に単位文が描かれる。肩部文様帯の上下は点列界線帯で画され、文様帯はさらに 3 帯に細分し、波状沈線と短線列を挿入する。口縁内面には沈線 1 条が一周する。点列界線帯は佐野 1b 式以降普遍化し、佐野 2a 式で多用されるらしい。肩部文様帯の細分と合わせ、佐野 1b 式の特徴ではなかろうか。U7-2 は無文粗製深鉢で、外面は全面ケズリのままとし、内面もケズリののちナデで痕跡を消すが、器面は凹凸がない。丁寧なつくりで、これは佐野式の粗製土器の特徴だ。U7-1 と U7-2 は整合的だ。一緒に取上げられた小破片は取上げ時の混入だろう。埋甕 7 は佐野 1b 式段階の可能性があるが、結論は保留とし、最終所見は第 4 分冊で示したい。

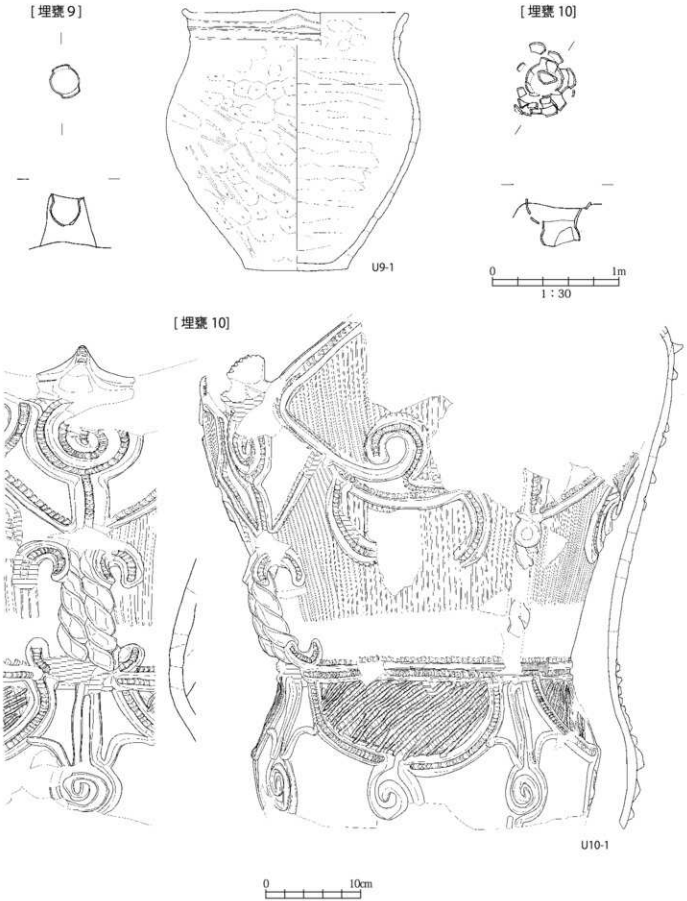


図 192　埋甕 9、埋甕 10 実測図

(8) 埋甕８ ［図 191、写真図版 36、52］【後期】

S6W12 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で埋甕８を検出した。切り合う遺構はなく、掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 50cm 以上の掘り方を設けたと推測できる。その中に U8-1 がやや傾きつつも正位に埋置されていた。U8-1 の底部は完存するものの、体部下半は 1/5 程度しか残らず、体部上半は完全に欠失する。全体として遺存状態が悪く、攪乱などによる欠失部分が大きいと推測され、埋納状態の復元は困難である。U8-1 の下半は変色が認められないが、日常的に使用されない土器だったとも言い切れない。埋甕埋土には特別な所見はない。

U8-1 は粗製深鉢もしくは、精度の低い有文深鉢体部下半で、器壁は厚い。外面のケズリは部分的で、オサエ痕跡が顕著に残るが、底部直上だけは全面的にケズリが行なわれる。内面はケズリがなく、オサエ痕が顕著だ。後期の粗製土器の技法だと推測するが、それ以上は不明だ。

(9) 埋甕９ ［図 192、写真図版 36、37、52］【浮線文期】

S36W21 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で 28 号住居の掘り方を平面的に検出し、ほぼ同時に、その埋土中に埋甕９を検出した。埋甕９の埋設土器は完存するので、埋甕９が 28 号住居を切るのは明白である。掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 50cm 以上の掘り方を設けたと推測できる。その中に U9-1 が正位に埋置されていた。U9-1 は口縁部の一部が欠損するもののほぼ完存する。完形個体が選ばれて埋設されたのだろう。U9-1 は風化が著しく、特に器体上半の外面は変色して、2 次焼成の可能性がある。底部付近は変色がなさそうだが、煮沸痕跡の有無はわからない。埋甕埋土には特別な所見はない。

U9-1 は装飾の少ない深鉢だ。直径は 25cm 弱とやや小ぶりで、器高は 30cm に満たない。体部上半に最大径があり、緩くくびれて、口縁部は小さく開く。口縁部に幅広い沈線を２条巡らし、上位の沈線はところどころ口端に接し、その接続部分が小突起状をなす。この沈線２条は隆線手法の変形かと思われ、浮線文甕の中に類例を見る。浮線文系土器の甕ならば器高はずっと高いはずで、肩部も稜をもたせるはずだ。かなり異相を呈するといわざるを得ないが、浮線文系の変種と考えたい。

浮線文並行期に東海地域以西では甕棺墓が普遍化する。中部高地ではあまり知られていないが、埋甕９はその数少ない類例ではなかろうか。

(10) 埋甕 10 ［図 192、写真図版 37、52］【中期後葉Ⅰ期】

S12W48 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で２号住居（新）と２号住居（旧）の掘り方を平面的に検出し、ほぼ同時にその埋土中に埋甕 10 を検出した。埋甕 10 の埋設土器は完存するので、埋甕 10 が新旧双方の２号住居を切るのは明白である。掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 80cm 以上、深さ 60cm 以上の掘り方を設けたと推測できる。その中に U10-1 が正位に埋置されていた。U10-1 は口縁部が２ヶ所大きく欠損し、波状口縁波頂部も欠くが、虫食い的な欠け方なので埋設当初は完存していたと推測する。一方、体部下半～底部は全面的に欠損しており、こちらは意図的な毀損だと推測する。U10-1 の体部下半の欠損部周辺は被熱によって明色に変色しており、日常的に使用された土器が埋納されたと判断する。埋甕埋土には特別な所見はない。

U10-1 は完存すれば高さが 100cm もありそうな特大品だ。くびれが緩いキャリパー形の、櫛形文土器の系譜を受け継ぐ深鉢だ。波状口縁は４単位と見られる。体部上半は非常に幅広い文様帯となり、２条の隆帯で単位文を繋ぎ、区画内には腹竹管の沈線を充填させる。くびれ部～体上半部にかけて貼付される２条の粘土紐を捩り合わせた把手が特徴的だ。体部下半は櫛形の区画が４単位配置され、籠目文が充填される。中期後葉Ⅰ期に属する。

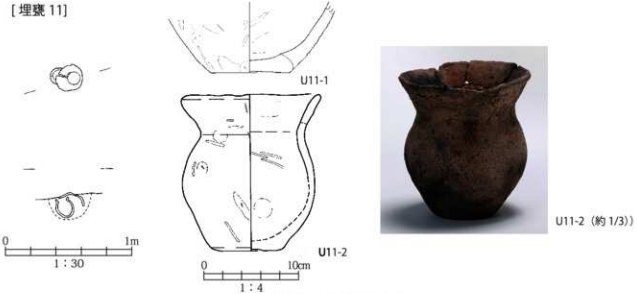


図 193　埋甕 11 実測図・写真

(11)　埋甕 11　[図 193、写真図版 37] 【後期前葉？】

S9W18 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で埋甕 11 を検出した。切り合う遺構はない。掘り方は識別できなかったとの記録があるが、写真では径 50cm ほどの掘り方があるように見受けられ、どちらが正確なのかは不明だ。いずれにしても掘り方の中に 2 個体の土器、U11-1 と U11-2 を重ねて埋設していた。U11-2 は小形の完形深鉢で、U11-1 は深鉢の底部だ。U11-2 をわずかに傾けつつ正位に置き、その上に U11-1 を伏せて、U11-2 の口縁部を塞ぐように重ね合わせており、蓋をしたような状態であった。おそらくは蓋にする目的で、底部だけを打ち欠いて利用したのだろう。埋甕埋土には特別な所見はない。

U11-2 はいったんくびれて口縁部が単純に外傾する。やや厚めで、底部は上げ底にし、文様は全くない。器面はフラットとはほど遠く、明瞭なケズリやミガキはなく、かといってオサエ痕も不明瞭で、整形に手がかけられていない。底部周辺に被熱による変色は認められない。U11-1 は中央に網代圧痕が残るが、ほとんどナデで消されている。外面のうち半分は明瞭なケズリが残るが、半分はナデ痕跡しか残らない。被熱による変色は少々ありそうだが、定かではない。2 点とも特徴は乏しく、位置付けに苦しむが、後期前葉の可能性を考えておきたい。

(12)　晩期前葉～中葉の埋甕

11 基の埋甕の内訳は、中期 1 基、後期 4 基、晩期前～中葉 5 基、晩期後葉 1 基である。その中で注目すべきなのは晩期前葉～中葉の 5 基である。

この 5 基に共通する特徴を挙げる。第 1 に住居の施設ではなさそうである。5 基の埋甕周辺を精査したが、住居に関わりそうな遺構・施設は発見できなかった。一方で、この時期の竪穴住居を炉 2 と F1 号住居も含めて 9 基発見したが、いずれも埋甕はなかった。遺存条件が悪い遺跡ではあるが、屋内施設ではないと判断してよさそうだ。第 2 に構築位置だが、埋甕 2 以外は 10m 四方程度の範囲に集中し、埋甕 2 も含めて見れば、住居から 5m ～ 10m 程度離れた場所になる。隣接はしないが、日常生活空間の一角に当たりそうな位置だ。第 3 に日常生活で使用した煮沸痕の顕著な深鉢を利用している。U5-2 以外は大形で、有文の精製深鉢であっても精度は高くなく、無文の粗製深鉢も用いられる。第 4 は全て正位で埋設される。

次は例外がある共通点である。第 1 は U5-1・U5-2 を例外として、意図的に底部を欠損させた土器が使用

される。第２は意図的に欠損させた口縁部を埋甕内に投入するか、口縁部欠損は無いが別個体を埋甕内に投入する。有文深鉢使用の３基がこれに該当する。無文深鉢の２基・３点が口縁部を欠損するのは、有文深鉢の埋甕と共通すると見ることもできる。

埋甕２は埋甕４・埋甕５・埋甕７に先行すると思われ、時間と共に共通性が少しずつ変化してゆくのではなかろうか。埋甕に伴う作法のようなものが、変化してゆく過程を示す事例ではなかろうか。

晩期前葉～中葉の埋甕比較表

No.	土器（深鉢）	底部	口縁	埋甕内投入	数量
埋甕２	中ノ沢Ｂ類型深鉢	欠損	埋納時毀損	口縁投入	１個体
埋甕４	佐野１ｂ式深鉢	欠損	埋納時毀損	口縁投入	１個体
埋甕５	佐野式無文深鉢	あり	欠損		２個体並置
埋甕６	無文深鉢	欠損	欠損		１個体
埋甕７	佐野１深鉢	欠損	欠損せず	別破片投入	１個体